
姫巫伝説・彩香 さいか 2

氷中冴樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫巫伝説・彩香　さいか　2

【Nコード】

N5313D

【作者名】

氷中冴樹

【あらすじ】

史上最強のサイバー・ウェポンと、天下無敵の人妻女子高生は、聖麗高校を舞台としていつ果てることのない、天地を揺るがすバトル・ロイヤルを続ける……ハズ、だった。ところがここに、単純で純情だが、思い込みの激しい、変態オタク的科学部長が絡んで来た。人工の生命を持つ少女と、純真に科学を愛する青年との、許されぬ恋の行方。それは単なる変態なのか、はたまた純愛なのか？何が何だか良くわからないままに、生命と、純粋な魂とを弄ぶ者達に対して、彩の姫巫、彩香の怒りが爆発する……？

第1節（前書き）

この物語は、先に掲載しました『姫巫伝説・彩香！』^{さいか}の続編に当たります。

しかし、完全に1つの独立した物語となっておりしますので、先の作品を御存じ無い方でも、問題なく読むことが出来ます。もし、この作品がお気に召しましたら、どうか先の作品も読んでいただければ、これに勝る喜びはありません。

なお、先の作品の前書きでも触れましたが、1つお断りがあります。通常、ミコという漢字は「巫女」と書きますが、「巫」でも間違いではありません。「男巫」^{おにうらみ}ということばがあるくらいです。また、この作者は「あんのん <http://ryuproj.com/cweb/site/aonow/>」というホーム・ページや HINAKA の「あんのん・ブログ <http://blog.sonet.net.jp/aonow/>」で、こちらにはまだ掲載できない物語や、アニメやマンガなどの評論や感想等を載せています。そちらも御覧いただければ、幸いです。では、この物語が、一時の楽しみとならん事を！

第1節

姫巫伝説・彩香　さいか　2

《無敵の人妻女子高生対史上最強の中国少女!》

プロローグ

薄暗い部屋の中を、取り巻くようにして、大きなモニター・スクリーンが光を放っている。

それまで、様々な映像を映し出していたらしいそれらのスクリーンも、今はただ灰色の画面や、目障りなノイズをチラつかせるだけだった。

「　と、いう訳だ」

「なるほど、それで？」

モニターのスวิตチを切ろうともしないで、部屋の中の人影の一つが、隣りの人影に話しかける。

話しかけられた人影が、葉巻のようなものに火をつけた。人工の小さな光がそこかしこで明滅する、薄暗いこの部屋の中には不似合いな明りが、ポツンと灯った。

「いよいよ、実戦テストに入りたい」

「当然だな。実戦で役に立たない兵器など、子供のオモチャに過ぎん。だが、これにふさわしい実戦テストの場があるかな？」

こういった場所で、こそこそと話し合われることの、例外に漏れず、この話も健全さからは、ほど遠い内容だった。

「こいつの特徴は、一国の軍隊を壊滅させることではない。そんなことは、核ミサイルにでもまかせればいい。いささか、時代遅れではあるがな　」

「というと、今売り出し中のピン・ポイント攻撃か？」

「その通り、しかも、このピン・ポイントは建物どころではない。地上のどんな場所、どんな大きさのモノでも、思いのままに、正確に破壊できることにある。例えば、一國中のたった一人の人間の、指一本とかな」

「そういうことは、対人テロと言うんじゃないか？」

葉巻を喰わえた人影は、やや憂鬱そうだった。

しかし、もう一つの人影は、その言葉に首を振り、心外だと言わんばかりの口調になった。

「これは、テロではない。レッキとした、軍事行動だ！」

「で、その目標は？もう決めてあるのだろうか？」

葉巻を喰わえた人影の言葉に、もう一つの人影が、初めて手元の操作盤をいじった。

すると、正面の大きなスクリーンに、一人の人物の姿が映し出された。その隣りには、細かな文字と数字が浮かんた。

「君に、少女趣味があるとは意外だったな、それも東洋人が好みとは」

スクリーンの照り返しを受けて、葉巻を喰わえた初老の男は、その知的なメタルフレームの眼鏡の奥で、不快気に目を細めた。

葉巻の男と同じように、スクリーンの照り返しの中で、小男はそんな皮肉な言葉に醜く唇を歪めた。髪の毛の薄い頭を掻きながら、彼は手前の小さな卓上モニターを指差した。

「こいつが何者か、そのデーターを見てから、言ってくれ」

髪の毛の薄い小男の言葉に、渋々葉巻の男は、声に出して文字を読み始めた。

「ふん、姓名、サイカ・アラミ。年齢、推定十六歳。最新所在地バカバカしい、この娘がいったい何だって」

葉巻の男が、抗議の声を発しようとした時、小男は黙って画面の上を指差した。そこには、この資料の所属が、簡単な記号で示してあった。

「このデーターが、最重要機密！？閲覧に、大統領の許可がいるだ

と！おいッ、まさか　　」

「もちろん、許可は得ていない。何なら、君が大統領に頼んでくれるか？大統領の信任厚い、国防大臣閣下」

「貴様、これをどうやって？」

「まア、色々とな　　そんなことより、出所に納得したのなら、早く先を続けてくれ。まさか、コピーを取って提出するわけには、行くまい？」

葉巻の男は、メタルフレームの奥から、厳しい視線を小男に送っていた。やがて一息吐くと、彼は先を読み進めた。今度は、声を出さずに。

「通称、彩の姫巫　さいのひめみこ、ふむ。国内のみならず、現時点で世界最高のサイキッカーだと！？その能力は未知数、いや、この記号は無限大　まさか、そんな　国内の一般高校に在学中？何を考えているんだこの国は！？こんな、能力者がただのハイスクールの生徒だというのか！？」

「問題は、その先だ。現在までに、誘拐・暗殺などのテロの対象になったことは、公式の記録だけで四十六回。それも、CIAを初め、かつてのKGB、モサド、大地の怒り、グリーン・アスパラガス　　」

「そうそうたる、メンバーが、それも大変な規模で攻撃している　そのすべてが失敗だと！？なんと、あのアナコンダまで失敗か　　」

次々と、表示されるデータと、映像に、葉巻の男も次第に声が低くなった。

そんな葉巻の男の表情の変化に、小男も勝ち誇るどころか、自分も声を低めた。

「それどころか、あの超一流の殺し屋、世界最高のスナイパーは、今ではこの娘のボディー・ガードのような仕事をしているらしい。それに、ここに載っているのは、公式に確認されたものだけだ。非公式なモノまで含めれば、この娘の存在が知られてから、今日まで

に、その襲撃回数は軽く三桁を越えるだろう」

「信じられん、こんな化物みたいな女子高校生が、存在するなど

」

「だろう。どうだ、これは合衆国にとって、充分な、潜在的脅威とは、言えないかな？」

小男の、皮肉を込めた不敵な言葉に、葉巻の男は、思わず口をつぐんだ。

「現在、ペンタゴンやCIAなどは、この娘に対して何のアクションも起こしていない。と言うより、起こせないと云った方が正しいな」

「この国には、『触らぬ神に、祟りなし』という諺がある」

「神、ゴッドか、あるいは悪魔か　　ともかく、この娘を葬っても、合衆国にとって得にこそなれ、損にはなるまい？」

「大統領と、この娘の近親者の意見は、違うだろうがな　　」

葉巻を喰わえ直して、初老の男は目を閉じた。

その穏やかな表情に、小男は皮肉な視線を送った。

「確か、この娘には、同棲している男がいるはずだ」

そう言って、小男は操作盤の指を動かした。

画面に、しょぼくれた、青年の姿が映し出された。

「ホーツ、自分の学校の教師を伴侶にすると、この国も進んだモノだな。もっとも、この娘だけが、例外かも知れんが　　なるほど、確かにこの青年は、愛する者を失って悲嘆に暮れるだろうな。

気の毒なことだが　　」

「そういうことだ」

小男は、意味有り気に醜く唇を歪めて笑った。

初老の男は、葉巻をもみ消すと立ち上がった。

「念のために確認しておくが、万が一にも我々のN2が、失敗するようないことはないだろうな？」

「N2は、我々が開発した、史上最強のサイバー・ウェポンだ。その心配はない。どうだね、この計画を大統領には？」

小男は、唇を皮肉に歪めてみせた。立ち上がった、その顔をはるかに見おろす形の、初老の男にはそれは不快な景色だった。

「今は、伏せておこう。なんであれ、緊急の必要のない、しかも十六歳の女子高生を葬る計画など、あの方が承認するとは思えん。最高指導者としては、少々ロマンチストなところが、おありだからな」その言葉には、彼の現大統領に対する不満が覗いた。それを指摘して、ますます彼の不快さを高めるようなマネは、小男もしなかった。

初老の男は、背後のスクリーンを振り返った。

「ミス・サイカ、今の内に短い青春を充分楽しんでおきたまえ。愛する者と共に」

気障なセリフを口にする、初老の男は部屋の外に消えた。小男は、歪めた唇をグレテスクな舌でペロリとなめると、その後続いた。

薄暗い部屋の、モニターから明りが消え、すべての小さな光もその力を失った。後には、深淵な闇だけが取り残された。

第2節

娘 娘 ニヤンニヤン 登場

荒神彩香 あらみ・さいか は人妻だった。

それは、疑いの無い事実だった。しかし、彼女自身を例外として、その事実満足している者は、誰もいなかった。彼女以外の多くの者達、特に彼女の夫とその近親者は、その事実を苦々しさと、困惑を含んだ、複雑な思いで追認していた。

しかも、彼女は天下無敵だった。だが、そのことに満足している者は、彼女自身を含めて一人もいなかった。

彩香は、自分の持つ能力を疎ましく思っていた。これまでの、彼女からその力を奪おうとする、彼女自身も含めたあらゆる努力は、すべてが無駄に終わっていた。今では、彼女自身もそのことにこだわる、無益な努力を止めていた。

そんな、天下無敵の人妻女子高生の通う私立聖麗 せいりょう 高校は、現在も文化都市として、観光を中心に栄える古い都にあった。その古い都の、最もにぎやかな繁華街のド真ん中に、その学校は建っていた。

「だいたい、どうして、十六歳の現役高校生が、人妻だなんてことが、問題にならないの？」

学校の校舎の裏手で、そんな素朴な疑問を口にした女子生徒がいた。彼女は、この頃の学生服としては、むしろ平凡な部類に入る紺のブレザーの制服を、だらしなく肩にかけていた。

この春、他の高校から転入して来た彼女は、いわゆる不良とか、ツッパリとか言われる態度の持ち主だった。その時も、片手には愛用のタバコを持っていた。

言われた相手も、同じ制服の女子生徒で、彼女の方も御多分に漏れず、同じようなハミ出し者だった。だが、この学校に初めからい

たために、少なくとも、校内でタバコを吸うという、危険なマネには参加していなかった。

「あんだ、まだ、懲りないの？この間、会長に突っかって、酷い目にあつたばかりでしょう？」

「別に、逆らおうっていうわけじゃないさ。あんな、化物相手に、勝ち目はないからね。だけど、そんな化物を、この学校が平気で飼っていることと、世間が誰も注目しないことが、不思議でさ」

化物こと荒神彩香は、その神秘的な容姿と、本性を欺く、お嬢様然とした物腰で、この学校の男子生徒から圧倒的な支持を受けていた。彼女はその人気を背景に、まんまと生徒会長の座に付いていた。もちろん、彼女がまともに、会長の仕事を遂行していないことは、誰の目にも明らかだった。

「彼女の爺さんが、政財界の大物で、この学校の理事だということ、知ってるんだろう？」

「ああ、でも、教師と生徒が夫婦で、同じ学校に通っているなんて絶好のスキヤンダルを、マスコミが取り上げないほどの、大物ってことか？」

「首相の首なんて、簡単に変えられるってことだから、そうなんじゃないか？マスコミだって、命は惜しいだろうし、でも、もう一つ。聞いた話じゃ、あの会長には、戸籍がないって話だよ」

「戸籍が、ない？」

「ああ、前にもあんだと同じように、興味を持った奴がいて、結構顔が効くんで、役所で調べたらしい、その時、荒神彩香って名前、どこにもなかったんだと」

「そんなことが、あるのかよ？だって、アイツは、高野ってセンコウト、正式に結婚してんだろう？婚姻届ってやつが、あるんじゃないのか？」

「そのへんが、よく、わからないのさ、あッ！？」

そこまで言った女子生徒の顔が、硬直した。タバコを持った方が、その表情に驚いて振り返ると、そこには、彼女達と同じ制服を着た、

女子生徒が立っていた。

その女子生徒は、ポニーテールのように髪を高いところで束ね、ブレザーを着ずに、無造作にブラウスの袖をまくっていた。彼女は、時期外れの青いリングをかじりながら、校舎裏に座り込んでいる、二人の不良女子生徒を見つめていた。

「あんだ達、噂話は、よそでしてくれないかな？」

その声の調子は穏やかだったが、トーンの低さが、その女子生徒の感情を、ハッキリと示していた。

話をしていた、元からこの学校にいる女子生徒の顔色は、見る見る青くなった。タバコを喰わえていた方も、表情が硬直することを隠すことはできなかった。それでも彼女は、何とか不良らしく開き直ろうと懸命になった。

「ふんツ、生徒会副会長の、柳京子 やなぎ・きょうこ さんは、そんな偉そうなことを、言える立場なのかい！？」

「さアね、そんな立場かどうか、アタシにはどうでもいいことさ。そんなに知りたきゃ、教えてやるよ。気に入らないとはいえ、彩香はアタシの叔父様の嫁さんだ。それは、正式な手続きに乗っとうっている。残念だがな 叔父貴の戸籍には、ちゃんと配偶者として名前が載っているよ。どうだい、これで満足かい？」

「あ、あたしは、知らない！聞かれたから、答えただけで、関係、ありませんから、し、失礼します、京子さん」

転入生に噂話を提供していた女子生徒は、体を震わせながらそう言つと、脱兎のごとくその場を逃げ出した。

京子は、それには見向きもせず、タバコを持った女子生徒を見つめていた。

「な、なんだよ、やろうつていうのかい！？」

それが、精一杯の虚勢である証拠に、彼女の持つタバコは細かく震え、灰が地面に落ちていた。

「いや、別に、ただ余り彩香に興味を持つと、あんだ、ロクなことにならないよ」

「へん、脅しつてことかい？副会長さん！？」

「いや、単なる忠告だ。ただし、あんたが、彩香はともかく、あたしの叔父貴の悪口を言い触らしたり、余計なチョッカイを出したら

」

そう言つた京子は、かじっていたリンゴを口元から離すと、いともあつさりど、ほとんど力を加えずに、握り潰した。

その京子の手から、ポタポタと流れるリンゴの汁を見ながら、女子生徒は息を飲んだ。京子が、この学校の拳法部の猛者達と、学生選手権に出たこともあるその部の顧問を、一撃で片付けた場面は、その女子生徒も目撃していた。

柳京子は、祖父が伝える高野流格闘術の後継者だった。そして、その柳京子に逆らう者は、この辺では誰もいなかった。長荒神彩香以外には、有り得なかった。

ちなみに、化物と呼ばれる荒神彩香に公然と立ち向かう者も、この柳京子以外には、この辺では誰もいなかった。

「わかったよ、別に、あんたと生徒会長を、どうこうしようってわけじゃない。ただ、興味があっただけだ、それだけだよ」

精一杯の強がり言いながら、タバコを喰わえたまま、彼女はこの場を離れようとした。

そんな女子生徒を、京子が呼び止めた。

「タバコは、きちんと火を消して、土に埋めときな。それでも、一応、生徒会の役員をやっているんでね、そんな格好でウロウロされると、困るんだ」

京子の言葉に、女子生徒は、渋々、壁に押し付けてタバコの火を消した。その後で、踵で壁際の土を掘ると、そこに吸いがらを落として、再び靴で土をかけた。

京子は、自分が握りつぶしたリンゴの汁を嘗め、その残骸を口に含んで、種だけ吐き出すと、背後を振り返った。

「彩香、そこにいるんだろう？」

「さすが、京子さん。よく、おわかりで

」

閉め切りのはずの窓が、音もなく開いた。腰までもある長い黒髪を、首の後ろの、赤いリボンで縛っただけの彩香が、上半身を覗かせた。

度の入っていない、メタルフレームの眼鏡をかけた、そんな生徒会長の優等生的な美人顔に、京子はケツという態度を取った。

「何が、よくわかりで、だ！何が、転入生が迷子になったから、捜して来てくれた！？ありや、転入生は転入生でも、この春の転入生じゃないか、それも、上級生の！どうせ、お前は、あいつがここにいて、何を話しているか知っていて、アタシに釘を刺させようとしたんだろう？」

「転入生が迷子なのは、本当ですわ。ただ、あの方達の前に、私が出て行くと、色々、面倒ではありませんか？私は、あなたみたいに、脅すのは得意じゃありませんから」

「なんだと」

京子の表情に、凶暴な影が落ちた時、彩香の立つ窓のある教室に、一人の教師が入って来た。

絵の具で汚れた白衣を着た教師は、彩香と窓越しに外にいる京子を見つけて、やや驚いたような表情をした。

「二人とも、こんなところにいたのか？転入生は見つかったぞ。もういいから、教室に戻りなさい。もう少しで、今度は君達を、迷子として、校内放送で呼び出すところだった。彩香、転入生は、君のクラスだ。ちゃんと、面倒を見るんだぞ」

「わかってますわ、先生！」

それまでの、ややきつい表情とは打って変わって、目尻を下げた彩香は、尻上がりの鼻声でそう言うと、教師の片腕に抱きついた。

「叔父様、校内では、夫婦ではなく、生徒と教師では、ありませんでしたかしら？」

京子は、窓枠をヒラリと飛び越えて教室に入ると、皮肉を込めて言った。生徒会の副会長は、自分の敬愛する叔父にすぎりつく彩香に、鋭く冷たい視線を浴びせていた。

彩香は、そんな京子に心の中では舌を出していた。だが、表面は涼しい顔をしていた。

「その通りだ京子。いや、柳君。だから君も、叔父様とは呼ばないように」

「嫌ですわ、荒神君だなんて　私は、高野。先生と同じ、高野ですわ」

「卒業するまで、学校内では荒神で通すという約束だったはずだが？」

「もう、先生の、いじわる！」

二人の会話に、限らないバカバカしさを感じた京子は、肩をすくめて、その使われていない教室を出た。

そんな京子の態度に、聖麗高校の美術講師である高野透　たかの・とおる　は、明らかに気恥ずかしさを感じていた。そして、彩香の腕を振り払うように離れた。

「彩香、いや荒神君。その窓は、元通りに閉めておくんだ。いいね？」

彩香が外を覗き、京子が入って来た窓を指差して、美術講師は念を押した。そして、足早に京子の後を追うようにして、教室を出て行った。

彩香は、その背中にハイと、明るい声で答えると、その窓に向かって片目をつぶって見せた。すると、窓は、音もなく閉じられ、その内側から板がはめ込まれて、釘で止められた。その間、何の物音もしなかった。

彩香がその教室のドアを出ていた時、その教室を人が使用したという気配は、跡形もなかった。彩香が外に出ると同時に、ドアは音もなく閉り、静かに鍵が締まった。もちろん、彩香がそれに、指一本触れることはなかった。

そこは、元通り埃だけが積もった、閉鎖された教室となった。その中に、しばらくして虹色の光が輝き始めた。やがてそれは、一人の女の子の姿になった。

黒く長い髪を、一本の三編みにまとめていたその女の子は、袖も無く、膝も丸出しの、短いチャイナ服に身を包んでいた。彼女は、せいぜい十二歳前後の、可愛い中国娘にしか見えなかった。

「マックス！あれが、今回のターゲット、サイカ・アラミ、あるネ？」

閉め切った教室に現われた、チャイナ服の少女は、まるでそこに誰かがいるのかのように、人気のない空間に向かって言った。

『そうです、ニャンニャン。あれが、我々の実戦テストのターゲットです』

「データー通り、凄い能力者あるね。この部屋、見るあるよ。さつき三人もいたあるのに、まるで、ここ何年、誰も入ったことないみたいあるよ」

ニャンニャンと呼ばれた少女は、その肌の色と髪の色からは不似合いな、青い瞳を輝かせて、その埃っぽい教室を見回した。

『現状回復能力があるのでしょうか？我々のように、物質の構成分子を、再構成することが出来るとは、思えませんが』

「違うあるね、これは、うちのやり方とは違うあるよ」

『では、どういうやり方だと、ニャンニャンは思っているのです？』

「この方法を説明する、一番、簡単な言葉あるね」

『何ですか、それは？』

チャイナ服の少女は、愉快そうに目を細めると、見えない相手に向かって、茶目っ気たっぷりに言った。

「魔法、という言葉あるね」

『魔法、ですか？』

「確か、ミス・サイカのことを、魔女と呼んでいた資料も、あったあるネ」

『魔女、ですか　ニャンニャン、最初のターゲットとしては、少しやっかいじゃありませんか？』

「面白そうあるよ、もう、戦車やミサイルは飽きたあるからネ！マックス、転送して」

その言葉が終わるか終わらない内に、少女の体は虹色に発光し、やがて暗い教室の空気に、溶けるように消えた。

後には、埃っぽい教室の床に、小さなチャイナ靴の跡だけが、残っていた。

第3節

危険な転校生

ニヤンニヤンの登場は、彩香のクラスのみならず、聖麗高校全体に、ちょっとした波紋を投げかけた。

これまで、聖麗高校男子生徒の人気は、完全に二分されていた。片方は、不思議な力と怪しい魅力を持った、純日本風美人で、お嬢様の性格の荒神彩香。もう一方は、破壊的暴力主義者でありながら、直情的で男勝りのサッパリした性格をしている、柳京子。

彼女達は、聖麗の魔女として、学内はもちろん近隣の学校では知らぬ者がいないほど、恐れられていた。それと同時に、生徒会長と副会長として、学内の生徒からはそれなりの、尊敬も信頼も受けていた。

この聖麗高校は、繁華街のド真ん中という、風紀上かなり危険な場所に建っていた。それにも関わらず、この学校の生徒は、不良やヤクザに怯える心配が、まったくなかった。それは一重に、彼女達二人の活躍によるものだった。

そんな、男子生徒の人気図の中に、可愛らしい中国娘が、突然飛び込んで来たのだった。なんと言っても、京子は、余りにも強力過ぎて、普通の男子生徒の手には余るし、彩香には合法的な伴侶がいた。

二人とも、憧れとして祭り上げておくにはちょうどいいが、身近なアイドルという趣には、かなり遠い存在だった。

「みんな、元気か！私、娘娘 ニヤンニヤン あるネ！よろしく、あるよ！！」

と、自己紹介の時、明るく、元気に叫んだチャイナ服姿の少女は、たちまちの内に全校中のアイドルとなった。

可愛いということに、男子以上に夢中になるのが、当節の女子高

生達だった。昼休みともなると、購買部へランチを買いに現われたニヤンニヤンの周りには、男子と女子の黒山の人だかりが出来た。「ヘーッ、アメリカで英才教育を受けて、まだ十二歳だけど、高校生なんだ」

「なにに、御両親は中国系アメリカ人なの？それで、瞳が青いのね！？」

「この学校には、特別留学生として来たんだって？」

「えッ、そのチャイナ服、制服が出来るまでだけなの？もったいないアー」

青い目の、チャイナ服を着た少女は、群がる生徒達を嫌がるどころか、その矢継ぎ早の質問に、嬉しそうに答えていた。

その明るさと可憐さが、またまた、男子生徒と女子生徒の人気を呼び、この間まで、彩香や京子の親衛隊を気取っていた連中まで、「ニヤンニヤンを汚れた日本社会から守る会」なるものの仲間に加わっていた。

「どーでもいいけど、このバカ騒ぎは、いつまでつづくのかしら？」
食堂の向こう側の、生徒達の群れを横目でみながら、京子は愛するメロンパンを頬張っていた。

その前で、彩香は実家の婆やが作ってくれた、特製漆塗り、五段重ねの重箱弁当を広げていた。

「あの娘が、あたしと決着をつけるまですわ」

「なん、だって？」

彩香の言葉に、京子は思わず飲みかけた珈琲牛乳で、むせ返るところだった。

うつかり、口元からこぼした珈琲牛乳を、手の甲で拭いながら、京子はマジマジと彩香を見つめた。相手の視線にはお構いなく、この天下無敵の人妻は、平気な顔でロースト・ビーフをつまんでいた。「私を抹殺するために、彼女は来たのですわ」

「抹殺って、あれかい、あの可愛い顔して、テロリストってやつか？」

「テロリストとは、少し違いますわね。史上最強のサイバー・ウェポン。その試作品だというお話ですわ」

自分好みに、やや柔らかく焼き上げてある卵焼きをつまみながら、彩香は人事のように言った。もつとも、彼女に対してそれを指摘したなら、彩香はためらうことなく、だって人事ですものと、答えただろう。

京子は、そんな彩香の反応には慣れていた。彼女もまた、まるで新聞の三面記事に対するような態度で、彩香に先を促した。

「サイバー・ウェポン？」

「正式な定義は、さだかではありませんけど、つまり人工的な有機生命体による兵器、ということらしいですわ」

「人工生命って、じゃ、あのニャンニャンは？」

「人工的に、合成された生命体ということに、なりますわね」

「あの、娘が？まさか」

信じられないという顔つきで、京子は、食堂の反対側にいる、生徒達に取り囲まれた、チャイナ服姿の少女を見つめた。

誰か、何か、つまらない冗談でも言ったのだろう。面白そうに、

青い目の少女は笑い転げていた。そんな彼女の姿に、人工とか、兵器とかを感じさせる要素は、カケラもなかった。

「その、サイバー何とかっていう話、本当かよ？」

「大蛇 だいじゃ さんの報告ですから、まず、間違いありませんね」

「大蛇？ああ、虹子さん。あの、性別不詳の元世界的スナイパー、アナコンダさんか あの人、まだ、あんたのところにいるんだ？」

「ええ、殺し屋家業は引退して、お祖父様の、秘書のようなことをなさっていますわ。その虹子さんの言葉によれば、あの娘は歩く核弾頭だそうです」

「核弾頭ね。まッ、あんたも似たようなもんだから、いまさら驚かないけど。この世にあんたほど物騒な輩が、他にもいたとはねエー」

その最後の部分は、明らかに京子の皮肉だったが、彩香は顔色一つ変えることはなかった。

「あら、京子さんほどではありませんわ」

「ほっとけ！で、あんたは、どうするんだ？」

京子の、深刻なはずなのだが、どこかのんびりした問いに、ゆつくりと食べ終わった彩香は、重箱を片付けながら答えた。

「あちらの、出方次第ですわ。こちらから、ご挨拶をしても良いのですけれど、そういうことは、先生がお嫌いですから」

彩香の言う先生とは、自分の夫であり京子の叔父である、高野透のことだった。

この優等生的純和風の生徒会長は、自分の夫以外の教師を決して「先生」とは呼ばなかった。教育上、これは極めて問題のある行為だと京子などは思っていた。だが本人である透以外、この学校の教師達は誰もこの問題に触れようとはしなかった。

その透は、彩香が進んで面倒を起こすことを、固く禁じていた。しかし、京子の見るところ、結果としてその決まりを彩香が守ったことは、ないような気がしていた。

「そんなこと言って、結局は、叔父様に迷惑かけんじやないのか？」

彩香は、そんな京子の意地悪な言葉には答えず、漆塗りの重箱を友禅染の見事な風呂敷に包んで、立ち上がった。

「そんなことよりも、これからの役員会の方が問題ですわ」

「役員会？なんか、あつたけ？」

生徒会副会長という、役員会でも重要な立場にありながら、京子にその自覚はまったくなかった。

やや軽蔑の眼差しで、彩香は京子を見おろした。

「秋の、文化祭の部屋割りですわ。今の内に決めておかないと、各クラブや、有志の団体が勝手なことを言って、なかなかまとまりませんの。もつとも、京子さんは、会議に参加なさったことは、ありませんものね」

「悪い悪い、どーも、そういうことは苦手で

でも、優秀な書

「記長がいるじゃない？」

そこで初めて、彩香は小さなため息をついた。

「そうなんですけどね、桃山さん。お風邪で、今日はお休みですの、困りましたわ」

「あーらら、そりゃ、大変だ」

「ですから、今日は、京子さんにも、出ていただきますわよ。決めることは、山ほどあるのですから、責任の一端は、担っていただかないと」

「げっ！冗談でしょう！？」

そう言いつつ、逃れようとする京子の、襟首を捕まえるようにして、彩香はこの職務に著しく不熱心な副会長と共に、食堂を出ようとした。京子は、引きずられるようにしながら、慌ててパンの残りを珈琲牛乳で飲み下していた。

そんな二人の様子を、多勢の生徒に取り囲まれながら、ニャンニャンは笑顔の下から、鋭い視線で追っていた。

『どうする、ニャンニャン？どうやら、サイカ・アラミは、我々の正体に気付いているようだぞ』

『様子を見る、あるね。ともかく、あの生徒会長、ボンヤリしているように見えて、まるで隙がないあるよ』

『それはいいが、マスターが文句を言っているらしい。ドクターが、困っているよ』

『困らせておくある。文句を言おうとどうしようと、ミッション作戦 に入っている以上、現場の判断が優先ある。これ、コマンド戦闘 の常識あるね』

『やれやれ』

チャイナ服姿の可愛い女の子が、そんな物騒な会話をその笑顔の下でしていることなど、周囲の生徒達はまったく気が付かなかった。彼らは、ワイワイと楽しそうに、少女に話しかけていた。

ニャンニャンは、それら生徒達の他愛のない話題に、巧妙に相づちを打ちながら、彩香抹殺の方法を思索していた。

第4節

科学部長の反逆

聖麗高校の科学部長、捺差内幸司 おさない・こうじ は、その日の放課後、出席したくもない生徒会の役員会に出席していた。

それは、秋の文化祭の部屋割りについてのためだった。誰かが出席しない限り、彼の科学部は、文化祭で展示する場所を確保できないことになっていた。

別に捺差内は、なりたくて部長になったわけではなかった。去年の文化祭が終わった後、くじ引きに負けて以来、彼はこういう時のためだけの、面倒な部長という肩書を押し付けられたのだった。

意外に広い生徒会の役員室には、テーブルを挟んで、捺差内の他に生徒会長の荒神彩香以下、生徒会の役員が全員並んでいた。ただ、副会長の柳京子だけは、行儀悪く部屋の窓枠に座って、リンゴをかじっていた。

「従って、クラブの活動内容等を顧慮した結果、科学部は校庭内に設けられる展示ブースの一角が与えられます」

下級生の役員の発表に、科学部長は顔色を変えた。

「待って下さい。科学部は、毎年、化学室を発表会場に使用してきました。何で今年だけ、化学室が使えないんですか？」

「科学部長。あなたの言い分はわからないではないけど、今年は調理設備を必要とする団体が、八つもあります。調理室以外で、ガス器具が利用できるのは、化学室しかありません。それに、今回、科学部が展示を予定している企画では、化学室の設備は特に必要ないでしょう？」

役員の言葉に、捺差内は、一瞬言葉に詰まった。

確かに、自分達がやろうとしていることに、化学室の設備は必要がない。だが、それは、白昼堂々と、校庭に展示できるようなシロ

モノでもなかった。

捺差内は、必死に喰い下がった。

「いや、化学室は必要なんだ。化学室でないと、展示発表が出来ないんだ！そもそも、プラズマ・ディスプレイ用のレーザー発振器と増幅用のモジュールを、アッパー回線で繋いで……」

捺差内の専門用語を並べ立てる説明に、役員達は顔を見合わせた。生徒会長である彩香は、表情を変えなかった。だが、手慣れた調整役である書記長を欠くために、審議がだらだらと続くことに、いかげん嫌気が差していた。

さらに、彩香に無理矢理連れてこられた形の京子に至っては、既に忍耐の限界を超えていた。精神安定剤代わりのリングをかじりながら、行儀悪く窓際に腰掛けたまま、副会長はボーツと初夏の空を見上げていた。

空は青く晴れ渡り、長袖では汗ばむほどの陽気だった。

「どうでしょう、会長？」

上級生でもある捺差内の、やや感情的な、熱に浮かされたような説得に押された役員が、彩香に助けを求めた。

思えば、これが、今回の騒動のそもそもの原因となるのだが、もちろん、その役員が知るはずもなかった。

「どうもこうも、昨年度の科学部の活動報告では、一つの部屋を与えられるほどの実績はないのでしょうか？しかも、今の活動内容も不明確。その上、文化祭の展示作品の内容もハッキリしないのであれば、他に方法がないでしょうか？」

「会長も、ああ言っていらっしゃる。科学部長。今年は、これで諦めて下さい」

「待って下さい。それなら、一部屋与えられるにふさわしい、活動の成果をお目にかければ、いいわけですね？」

彩香の表情はにこやかだったが、心の中で、何でこんな面倒なことをと、舌打ちをしていた。

そんな会長の思いとは無関係に、捺差内と同学年の別の役員が、

追い打ちをかけるように、不用意な次の一言を発した。そのことが、さらにこの科学部長を煽り立てた。

「それは、その通りだけど、会場の割り振りの変更は来週までだ。来週までに、そんな実績を見せることが出来るのかい？オマエら、変態オタクの集団に！？」

「出来るか出来ないか、やってみなければ、わからないじゃないか！」

それだけでなく、彼を部長とする科学部は、このところ一般生徒や教師から冷たい視線で見られていた。

今回のことに限らず、生徒会からも予算の減額などで、かなり冷遇されていた。もっとも、その理由の多くは、彼らが人目を避けるような、得体の知れない実験などを繰り返した挙げ句。何度も爆発騒ぎや、火事騒ぎを起こした結果だった。

だが、捺差内を初めとして同病相哀れむ形の科学部員達は、自分達の活動を、素直に反省したりする精神とは無縁だった。彼らは、自分達を理解しようとしていない生徒や教師達、特に彼らの活動を何かにつけて制約する生徒会に、そんな日々の不満を蓄積させていた。

「そもそも、今回展示作品の内容が固まっていけないのは、それに見合うだけの予算を、あんた達が認めないからじゃないか！？」

「自分達の無能を、俺達のせいにして欲しくはないな」

捺差内と同じ学年の男子役員は、意地の悪い笑みを浮かべていた。それが、典型的なイジメツ子の態度であつたために、同じ学年の女子役員が、嫌な顔をした。間に立たされた形の下級生の男子役員は、狼狽こそしなかったが、表情を硬くして、両者を見比べていた。副書記長という肩書であるばかりに、その男子役員は休んだ書記長の代わって、この場に立たされた不幸な立場だった。手慣れた書記長ならばともかく、この春、役員になつたばかりの彼には、明らかに荷が重過ぎた。

「それほど言うなら、俺達に予算をよこせ！それが出来ないなら、せめて、展示場所は化学室を使わせろ！！」

「予算をやって、何も出来なかったらどうする？科学部は、解散するか！？」

「ああ、やってやろうじゃないか！」

ほとんど売り言葉に買い言葉の乗りで、捺差内は叫んでいた。口にした彼自身、その実現の可能性をまるで持つてはいなかったが、ここで引き下がるわけには行かなかった。

副書記長は、困ったように生徒会長を振り返った。彩香は、小さなため息を一つ吐くと、この無意味な論争を終わらせようと、その薄い唇を開いた。

「わかりました。それほど言うなら、来週の今日まで待ちましょう。費用は、生徒会が持ちます。その代わり、もし、この日までに、目に見える実績が確認できない時には、科学部の出展そのものを中止にして、使った費用は来年の予算から引きますが、それでもよろしいか？」

彩香の言葉は、半分以上脅しだった。だいたい、来年の科学部の予算など、このままならないのと同じで、これは実質的に科学部の活動停止を意味していた。

その場のほとんどの役員は、これで科学部長が折れると信じていた。彩香にしては、珍しいほどまともな意見だと、京子も驚いたような視線を向けていた。

だが、その時の捺差内に常識論は通じなかった。もともと、余り他人の言い分に耳を貸すような、社交的な男でなかったが、変態オタク呼ばわりされた上に、無能と言われたことが致命的だった。

「いいでしょう！その挑戦、受けて立ちます！！」

そう宣言すると、捺差内はドアを閉める音も荒々しく、役員室を出て行った。

「あなた、ちょっと、言い過ぎよ」

別の女子役員が、捺差内を煽り立てた男子役員に、冷たい視線を向けた。

「いやーッ、あいつ、すぐムキになるから、ついね……」

「で、あと、何組、残っているの？」

そんな、無責任な男子生徒の言葉を無視して、彩香は尋ねた。
別の役員が、手元の用紙をめくった。

「それやこれやで、十八組です」

「いち、ぬーけた！」

それは、窓際の京子の声だった。

副会長にして体育実行委員長の彼女は、かじり尽くしたリンゴを、部屋のゴミ箱に放り投げると同時、自分も窓から身を躍らせた。

「彩香、後は任せた」

その言葉を残して、京子の体は、役員室のある三階の窓から、下のグラウンドに消えた。

「いつもながら、鮮やかなこと……どうして、三階から飛び降りて、なんともないのかしら？」

女子役員の一人が呟くと、周囲の役員も、毎度のことながら肩をすくめるしかなかった。

彩香の隣りに座る女子役員が、改めて彩香の方へ向き直った。

「ダメですよ会長。いつもみたいに、副会長と一緒に消えちゃ。今日だけは、ここにいてもらいますからネ！」

「ハイハイ……まったく、京子さんたら、うまくおやりになったものね」

そう、彩香が不承不承納得すると、ドアの近くの役員が、次の代表を呼んだ。

ドアを開けて、エプロン姿のクッキング同好会の会長が姿を見せた。それと同時に、彩香のみならず、生徒会役員全員の頭の中から、科学部の問題はキレイさっぱり、消えて無くなっていった。

彼らには、他に考えねばならないことが、山のようにあったのだ。しかし、科学部長、捺差内幸司にとって、これはいつの間にか、自分のプライドをかけた、大問題に発展していた。

『ネ暗、イジケ虫、無能で変態！オタクの集団！！』

彼の胸のなかで、この侮蔑の言葉が、生徒会を代表する荒神彩香

の顔と共に、大きく膨らんで、渦を巻いていた。

だいたい、彼を侮辱したのは彩香ではなかったし、ネ暗だのイジケ虫だのは、彼が勝手に妄想の中でつけ加えた形容詞だった。だが、捺差内にとっては、彩香が生徒会を代表して、自分を侮辱したように感じられていた。

ひよつとすると、彼は前々から個人的に、お嬢様然とした彩香に、反感を持っていたのかも知れない。ともかくこの科学部長は、単純な上に、思い込みの強い男だった。

「見てろよ、生徒会長！何が、聖麗の魔女だ！科学部の恐ろしさを、思い知らせてやる！！」

廊下でそう絶叫する捺差内を、周囲の生徒達や教師は、危ないものでも見るような目付きで遠巻きに見つめて、小声でささやき合っていた。

その中に、チャイナ服を着た青い目の中国娘の姿があることを、絶叫する科学部長が知るはずもなかった。

第5節

秘密兵器

生徒会に、挑戦状を叩きつけたという部長の言葉は、化学室の空気を一瞬で凍り付かせた。

農薬から爆薬を作る実験をしていた、白衣を着た部員達は、一斉に顔を見合わせた。その瞬間、一人の部員の手元が滑って、慎重に調査していた薬品が床に落ち、小さな爆発を起こした。

手慣れた感じで、防火用の毛布がかぶせられ、何とか火は消し止められた。床に、それ以前に付けられた、多くの焼け焦げに混じって、新たな焼け焦げができたのだが、科学部員達には大したことはなかった。

そんなことより、もっと重要なことが彼らにはあった。火が消えると、同級生達から変態オタク集団と決めつけられている男達は、くじ引きによって決められた部長に、一斉に詰め寄った。

「あの、荒神彩香と生徒会に、喧嘩を売ったって!？」

捺差内の誇らし気な言葉に、部員は絶句した。

やがて、白衣を着ていた者はそれを脱ぎ、てんでに帰り支度を始めた。

「なぜだ、どうして、帰るんだ？我々には、あの秘密兵器があるじゃないか!？」

「捺差内よ、バカだバカだとは思っていたが、これほどバカとは思わなかった。いいか、今のこの聖麗で、荒神彩香と生徒会に刃向かって、生き残れると、正気で思っているのか？」

「じゃア、この忌まわしい、専制独裁に対して反対しないのか？この圧力に、戦わずして屈するの!？」

完全に、捺差内の思考の方向性は歪んでいたが、彼の仲間達は、あえてそれを訂正しようとは思わなかった。

彼ら自身はどう思っているかと、彼らもまた、捺差内と五十歩百歩の、感覚の持ち主達だった。

「いいか、捺差内部長殿？お前さんが、分不相応にも喧嘩を挑んだ相手は、政財界を牛耳る大物の孫娘というだけじゃない！恐ろしくも、忌まわしくも、この学校の教師と、堂々と結婚しているんだぞ！」

「そうそう、その上、この街のヤクザはおろか、警察権力さえ手を出せない、化物じみた相手だ！俺達なんか、片手、いや、指、いや、瞬き一つで、この世から抹殺できるんだ。そんなの相手の争いに、巻き込まれたい奴なんか、どこにもいないぜ！！」

部屋を出ようとする部員達を、捺差内は必死になって止めた。

「何を言うんだ。我々には、究極の秘密兵器、無敵のB2があるじゃないか！？」

「B2って、あれか？」

部員の一人が、部屋の奥のドアを指差した。そこは、準備室と呼ばれる、窓のない小さな倉庫のような部屋だった。

その中に、捺差内達は、人目を避けるような器具や機材を、多数持ち込んでいた。

「そうだ、あれなら、勝てる！」

拳を振り上げ、目を潤ませる捺差内に対して、部員達は顔を見合わせると、肩を落とした。意気上がる捺差内の肩を、そんな部員の一人が軽く叩いた。

「確かに、B2のシステム理論は素晴らしい。防衛庁にだって、売り込めるかも知れない。だがなア、どうやってあれを実現するんだ？悪いことは言わない、今の内に、会長と生徒会に頭を下げて、挑戦を取り下げて来い……」

しかし、その言葉に捺差内は断固して、首を振った。

部員達は、再び顔を見合わせると、肩をすくめて背を向けた。

「栄光に満ちた科学部も、これで終わりだ！さらば捺差内。君のことは、永遠に忘れないよ……」

「おい、待てよ！おいッ！！」

捺差内の呼掛けの前に、むなくドアは閉ざされ、広い化学室には彼だけが取り残された。

窓の外からは、グラウンドで活動している運動部の、景気のいいかけ声が遠くに響いていた。

「先駆者は常に理解されず、ただ我が道を行くのみ、か……」

肩を落とした捺差内は、寂しそうに準備室へのドアを開けると、その中に入り、中から鍵を閉めた。

準備室の中には、様々なものが、雑然と積み重ねられていた。その中でも特に目を引くのが、壁一面に張られた等身大の女性の絵と、その前に置かれたケーブルで繋がれた、何台かのパソコンとモニターだった。

壁に張られた女性の絵には、精密な方眼が引かれ、その絵は正確に前後左右、上下と描かれていた。さらに、その絵の向い側には、同じように精密な、別の絵も描かれていた。

捺差内は、部屋の蛍光灯を消すと、パソコンに繋がる、複雑怪奇なシステムの電源を入れた。異様な輝きが、モニターを中心に現われた。すると、そこかしこでモニターの微かな駆動音と、小さな発光ダイオードの輝きが起こった。

やがて捺差内は、あるキーボードの前に座り、モニターに映し出された記号と数字を読んで、別の数値の打ち込みを始めた。

「見ている生徒会！見ている、荒神彩香！！必ず、このB2を一週間で完成させて、貴様らを、叩き潰してやる！！」

「ふーん、これが、B2モードあるか。面白いシステムあるネ！」

「そうだろう、こんなシステムは、世界のどこにもない……」
そう言いかけて、捺差内は、驚いて後ろを振り返った。

一人っきりのはずの、暗い準備室の中に、チャイナ服姿の少女が立っていたのだ。彼女は、捺差内の肩口から身を乗り出すようにして、彼の前のモニターを覗いていた。

「きッ、君は……？」

誰だ！どこから入った！？と言おうとして、捺差内は舌がもつれた。彼には、密室でこれほど女の子と密着した経験が、ほとんどなかったのだ。

狼狽える捺差内に、明るい微笑みを浮かべて、ニャンニャンは答えた。

「私、ニャンニャンあるネ。留学生ある、知っているか？」

捺差内は、首を振ると同時に、頷くという器用なマネをして見せた。

そんな科学部長の混乱など、気が付かないように、ニャンニャンはキーボードに触った。

「あッ、おい、こちら！」

慌てた捺差内が、制止しようとした。それを無視して、三編みを軽く振った中国娘は、目にも止まらない早さでキーボードを叩き始めた。

たちまち、モニターの中に、矢継ぎ早に新しいデータが現われた。それは、捺差内がどうしても解析できないでいた、数値転換理論の一部だった。ニャンニャンは、それを、手早く、理解可能な形式に表示し直した。

「何てこった……」

「ニャンニャン、合衆国で、電子工学やっていたあるネ。役に立つと思うあるよ」

そう言って、ニッコリ微笑んだニャンニャンの表情には、何の屈託もないように見えた。捺差内は、この娘の背後に、確かに後光が差していると感じた。

彼の中で、この娘の登場に対する不可解さは雲霧消散していた。それに代わって、去って行った部員達に勝るとも劣ることの無い、力強い味方の出現の喜びが満ちていた。

「君、ニャンニャンさんだっけ？手伝ってくれるのか！？」

「生徒会長を、やつつけるあるネ？もちろんあるネ！」

「よし、君を、我が科学部の臨時部員に任命しよう。これから一週

間、このB2を、共に完成させようではないか！」

「オーツ！」

ニャンニャンは、捺差内の言葉に、景気良く拳を突き上げて答えると、彼の膝の上に、潜り込むようにして座った。とっさに、捺差内はドギマギした。

チャイナ服姿の少女は、そのまますぐに、モニターの画面に新しい数値転換理論の解析結果を表示した。そのため、たちまち捺差内はその内容に引き込まれ、ドギマギを忘れてしまった。

『マックス、いいあるか？』

『いいですけど、本当にこんなんで、うまく行くんですか？』

表面では、捺差内と親し気に話ながら、ニャンニャンは心の中で、見えない相手と会話していた。

『この男の子のシステム理論、面白いアイデアある。ここの、このままの設備では実現できないけど、マックスと連動すれば、うまく行くあるよ。頼むね、マックス……』

『はいはい、でも、ドクターが何と言うか……』

そんな会話がなされているなど、科学部長はまったく気が付かなかった。

捺差内は、次々と実現して行くプログラムに、ただただ啞然として、夢中で次の理論展開を組み立てていた。

その日から、放課後、夜遅くまで、化学準備室から異様な物音と、男女の話し声が響いていた。しかし、捺差内だけが籠っているはずの化学室に近づく者はほとんどいなかった。さらに、その奥の準備室の中で行なわれていることに、興味を持つ者はまったくいないと言って良かった。

第6節

誤解と思い込み

留学生であるニャンニャンにも、ようやく聖麗高校の制服が届いた。

チャイナ服からブレザーの制服姿に替えた少女に、また一段と男女生徒達が騒いだ。

さすがに、その頃になると、何人かの生徒が、放課後の化学室内の様子に気が付いていた。話題の中国娘が、変態オタクとして有名な科学部長と、放課後になると二人つきりでいるらしいという噂が、次第に広まって行った。

「そんなバカな！我が聖麗高校永遠のアイドル、純真可憐な、あのニャンニャンちゃんと、あの変態オタク集団のリーダー、下劣な捺差内幸司が二人つきりでいるなどと、信じられない！誰だ？そんなデマを流すのは！？えーいッ、デマだ！それは、デマに違いない！」

と、口から泡を飛ばして喚いたのは、「ニャンニャンを、汚れた日本社会から守る会」の会長をもって任じている男子生徒だった。

彼に言わせると、科学部長の捺差内幸司は「悪しき日本社会の底辺に蠢く汚泥」であり、「いびつな欲望の権化」ということだった。

だが、その「ニャンニャンを（以下略）」の会長も、度重なる会員からの突き上げに、応じないわけには行かなくなった。やむなくある日の昼休み、彼は食堂でサンドイッチを頬張るニャンニャンに、まことに言い難そうに、とても遠回しに、噂の真偽を尋ねた。

「うん、そうあるよ、私、科学部長と放課後、一緒あるね。捺差内と一緒に、打倒生徒会している、あるよ！」

彼の質問に、ニャンニャン本人は、いとも明るくあっさりと、その事実を認めた。

可愛そうに「ニャンニャンを（以下略）」の会長は、そのまま、口から泡を吹いて、後ろへブツ倒れてしまった。この時をもって、「ニャンニャンを（以下略）」というはた迷惑な名前を持つ会は、自動的に解散してしまった。

しかし、だからと言って、この中国娘の人氣が衰えたわけではなかった。むしろ、彼女に対する好意は、その純情を一方的に踏みにじったと、勝手に思われた捺差内に対して、敵意と憎悪となって無差別に向けられた。

結果として、以前から、万人に好かれる傾向のなかった科学部長は、さらに謂れの無い迫害を受けることとなった。彼は、ニャンニャン・ファンの男子生徒からも女子生徒からも、徹底的に無視された。それどころか、足を引っかけられたり、後ろから押されたり、文字通り踏んだり蹴ったりの目に遭わされた。

しかし、どーいうわけか、捺差内は、これらをすべて、彩香及び生徒会の陰險な嫌がらせと考え、その打倒の炎をさらに燃え上がらせていた。

「見ていろ、荒神彩香！見ていろ、生徒会！お前達の悪行に、正義の鉄槌を下さん！！イテツ……」

「どうした、あるか？生傷が、絶えないあるネ！？」

拳を振り上げる捺差内に、ニャンニャンは小首を傾げた。

彼女は、生傷の絶えない部長を、化学室の過酸化水素水、つまりオキシドールで消毒してやることが、今や日課になっていた。

捺差内は、ピンセットで挟んだ脱脂綿で熱心に薬品を付けてくれる、そんな少女のためにも、虚勢を張らなくてはならなかった。

「生徒会の陰險な陰謀のせいさ！だが、こんなことでくじけるものか！！だが、これ以上、君に迷惑はかけられない。恐れれば、いつでも辞めていいんだよ……」

「ニャンニャン、辞めないある。必ず、一緒に打倒生徒会するあるネ！」

そう言って、明るく微笑むニャンニャンを、捺差内は思わずヒシ

ツと抱きしめた。

女性に疎く、臆病な彼としては、異例に大胆な行動だったが、それを忘れるほど、生徒会と敵対する感情が高ぶっていたのだろう。ニャンニャンは、抵抗しなかったが、心の中で舌を出していた。

『マックス。この人、利用するの、少々気が引けるあるよ……』

『そうですね、いい意味でも、悪い意味でも、今時珍しいほど、純情な人ですね』

自分が何をしているのか、遅まきながら気付いた捺差内は、少女がそんな話をしていることなどまったく、気が付いてはいなかった。そして彼は、顔を赤らめるとそそくさと、新しい機材の組み立てを始めるのだった。

ニャンニャンは、そんな科学部長の膝元に座って図面を広げると、必要な指示を出した。二人の視線が、狭く薄暗い部屋の中で絡まり、お互いに微笑んだ。

回路を焼き付ける捺差内の指先に、思わず力が籠っていた。

「誤解と思い込みが、一方的に事態を押し進めているわけですか？生徒会としては、迷惑この上ない話ですね」

一方的に意気が上がる科学部長と、そんな科学部長をこれもまた、一方的に虐待する一般生徒。その大元締めが、我が生徒会と決めつけられていることを聞いて、ようやく復帰した書記長は、嫌味を込めてそう言った。

そんな頼りになる書記長の言葉に、これも一方的に嫌味を言われた形の彩香は、苦笑いするしかなかった。

「そんなこと言っても、こんなになるなんて、思いもしなかったのですもの」

「別に、生徒会長のせいだとは、言っていませんよ。でも、放課後、男女が二人つきりで、密室に閉じ籠るといふのは、感心しませんね」「あら、私は、先生と二人つきりになりたいわ」

彩香の返事に、この生徒会の運営になくてはならない上級生は、頭を掻いた。

実際、この生徒会長がいながら、この学校の風紀が世間並以上に乱れないのは、もはや、奇跡と言っても良かった。

「ともかく、問題がこれ以上こじれない内に、あの二人に注意していただくのは、会長のお務めだと思いますが？」

書記長にそう言われれば、彩香としても反論のしようがなかった。この生徒会において、何より正しいのは、この書記長の意見ということに決まっていた。

彩香は、渋々、二人に会いに行っただが、自分が親友と公言する京子を巻添えにすることを、忘れなかった。

「何で私が！？」

と、叫ぶ京子を引きずるようにして、彩香は化学室に向かった。

第7節

部外者達

彩香が書記長に言われて、嫌々ながら、放課後の化学準備室へ向かった頃、同じように化学準備室を訪れた部外者があった。

それは、余り上品とは言えない訪問客だった。

「ずいぶん、楽しそうにしてるじゃねーか！ええッ、科学部長さんよ！？」

「二人つきりで、こんな暗い部屋のなかで、いったいどんな楽しいことを、していらっしやるのかしらね？」

実に嫌らしいイントネーションの、そんなセリフと共に、いきなり、鍵の掛かった化学準備室のドアが蹴破られた。

入って来たのは、以前、彩香に突っかって、酷い目にあつた、例の転入生とその仲間の女子生徒だった。二人は、ドアの枠にもたれるようにして、出口を塞ぐと、薄暗い小部屋に嫌らしい笑みを向けた。

「なッ、何だ、お、お前達は！？ここは、部外者、立入禁止なんだぞ！」

その連中の素性を知っている捺差内は、そう言いながらも、体が後ろに下がるのはどうしようもなかった。

「だーから、部外者じゃなけりやいいんだろぅ？」

「そうそう、アタイ達もお仲間に入れて欲しいのよね……」

そう言つと、この不良気取りの二人は、ケラケラと笑った。

「仲間に入りたいなら、仲間に入るよろし。でも、その前に、そのドアを直すよろしいネ」

高笑いを続ける女子生徒二人に、ニヤンニヤンはそう言つて立ち上がった。

捺差内は、慌ててこの世間知らずの留学生の袖を引いたが、少女

が気にする素振りはなかった。

事実上、この二人の不良は彩香と京子に押さえられていて、思うようには振舞えないでいた。彼女達は、そんな持って行き場の無い欲求不満の掃け口を、この可愛らしい留学生に見つけたのだろう。もしかすると、最初からこの娘の人氣が気に喰わなくて、因縁をつける機会を伺っていたのかも知れない。

「なんだと、このやろう。中学生の癖に、お高く止まりやがって！」
「ニャンニャン、中学生違う。高校生あるネ、そんなことも、わからないあるか？」

「ヤローツ、下手に出りや、いい気になりやがって！年上に刃向かうとどうなるか、課外授業で教えてやろうか！？」

そう言つて、元からこの学校にいる方が、いきなり、準備室の中にあつたモツプを掴むと、振り上げた。

外からそれを見ていた京子が、飛び出しかけたが、彩香がそれを押さえた。ニャンニャンに向かって振り降ろされたモツプは、空を切るとそのまま乱雑に散らかった、準備室の床を直撃した。

だが、勢い余つて折れたモツプの柄が、並べられたモニターの一つに突き刺さつた。

「やめろーツ！」

思わず、我を忘れた捺差内が、その女に飛びかかったが、もう一人の女に腹部を蹴り上げられて、床に倒れた。

しかし、一瞬でモツプの攻撃を避けたニャンニャンは、次の瞬間、モツプを振り上げた女の腹部に、体を潜り込ませた。中国娘は、その掌を相手の腹に当てた。

「ハッ！」

ニャンニャンの気合いもろ共、相手の体は宙を飛ぶと、外の化学室の壁に叩きつけられた。

「ヤローツ！気功法つてやつか！？」

とつさに転入生だった方は、準備室の奥に飛び込み、そこに山積みされた機材に向かつて、手近なパイプ椅子を掴むと、振り上げた。

「おいッ！その、変な術を使うと、この機械がどうなっても知らないぞ！？」

さすがに、ニャンニャンは一瞬ためらった。

その隙を、不良女子高生は逃さなかった。振り上げられたパイプ椅子が、角度を変えて、中国娘を襲った。

その瞬間、起き上がった捺差内自身が、自分でも信じられない行動に出ていた。彼は、振りかざされたパイプ椅子に、思いつき飛びついたのであった。

一瞬、自分の動きを押さえられた不良女子生徒は、後ろを向いたまま、片足を跳ね上げて、捺差内の股間を蹴り上げた。

「ギャッ！」

と、情けない声を残して、科学部長はその場に昏倒した。

「幸司！？よくもやったあるネ、部長が役に立たなくなったら、どうするあるか？」

何の役に立つのかはともかく、自分を助けようとして、捺差内が倒れたことに、ニャンニャンの眠っていた感情が目覚めた。ただ、この時この中国娘が思った通り、本当に科学部長が、可憐な少女のために行動したかどうかは、少々疑問ではあった。

ともかく、パイプ椅子を構えた上級生と、幼い留学生は、最高に険悪な雰囲気で見合っていた。

「ヤバイ！」

京子はそう呟くと、彩香を振り返ったが、彩香は静かに首を振っていた。

京子は、驚いたように、視線を部屋の中に移した。

「ゲッ！」

奇妙な声を上げたのは、パイプ椅子を振り降ろした女子生徒だった。

ニャンニャンの頭部に炸裂するはずの椅子は、その額からわずかな数センチのところで、ピタリと止まってしまった。押しても引いても、それはビクともしなかった。

女子生徒は、慌てて自分の手を離そうとした。しかし、その手はどうしても、パイプ椅子を握ったまま離れなかった。

「なんだ、いったい、どうして……」

そう言う不良娘の顔に、恐怖が宿った。自分を見上げる幼いはずの中国娘が、不敵にニヤリと笑ったのだ。

やがて、その青い瞳に、金色の光が宿ると、不気味に輝き始めた。「ギガ・マックス！」

『ニャンニャン、いけない！』

中国娘の言葉に、姿の見えない声が反対した。

しかし、三編みの少女の言葉と同時に、その小さな体が、金色の光を放ち出した。

「なに、いったい、なんなのよーッ！」

不良を気取っている女子生徒の、恐怖に引きつった声が、悲し気に化学室に響いた。

次の瞬間、準備室の機材が次々と動きだし、壊されたモニターまで、ニャンニャンと同じように金色に輝き始めた。

「やめてーッ！」

哀れな女子生徒の体が、パイプ椅子と共に宙に浮かぶと、その体も金色の光に包まれた。不敵な態度を取っていた彼女は、自分の体から自由が失われたことを知って、もはや恥も外聞もなく、泣き喚いた。

京子が、その光景を咂然と眺めていると、ようやく彩香が動いた。生徒会長が化学室の中へ入った気配を察して、金色に輝くニャンニャンが振り返った。

中国娘が振り返ると同時に、宙に浮かんだ女子生徒も、それにつられるように、化学室の方へ向きを変えた。

「そこまでに、なさいな……」

彩香の言葉に、ニャンニャンの表情が、奇妙に歪んだ。一瞬の後、宙に浮かんだ女子生徒の体が、弾けるように彩香めがけて飛んだ。

彩香は、まるで表情を変えなかった。女子生徒の体はそんな彩香

の直前で、何か見えない手に押さえられるようにして止まった。

しばらくの、奇妙な停滞があった。京子の足も、なぜか動かなかった。それは、恐らく数秒間の出来事のはずだったが、あるいは数分の一秒のことだったかも知れない。

やがて、それが嘘だったかのように、ニャンニャンの金色の輝きが消えた。周囲の発光現象も、次第に納まって行った。彩香は、わずかにその薄い唇の端を歪めて笑った。彼女が軽く指を振ると、空中に浮いたまま、気を失っている女子生徒の体が、京子の方に放り投げられた。

とつさに、京子はその女子生徒の体を受け止めたが、思わずバランスを崩してしまった。それは、その重みが、突然のように京子の両腕にかかったせいだった。

「何をする気か知らないけれど、無関係な方を巻き込むことは、感心しませんわね」

彩香はそう言いながら、もう一人の不良娘を助け起こした。その女子生徒も、気を失ったままだった。

「それは、『彩の姫巫』としての、忠告あるか？」

そう言うニャンニャンの声には、いつもの明るさはなく、どこか遠くから響いているようだった。

彩香は、穏やかな微笑を浮かべて首を振った。

「いいえ、この学校の生徒会長としての、お願いよ」

そして、女子生徒の腕を肩に担いだ彩香は、化学室を出ようと、ニャンニャン達に背を向けた。

捺差内が目を覚ましたのは、ちょうど、そんな時だった。

「何だって、何が、生徒会長としての、忠告だって？」

科学部長は、頭を振りながら、彩香が言った言葉の最後の部分を、取り違えていた。

「あなた方が、夜遅くまで、二人っきりでいることに対する、忠告ですわ」

そう言って、振り返った彩香は、ニャンニャンに向かって、片目

をつぶって見せた。

ニヤンニヤンも、わずかに、表情を緩めると微笑んだ。それは、いつもの可憐な留学生の、微笑みだった。

「なに言ってるんだい！教師と一緒にいるような、淫乱生徒会長に、そんなこと言われる筋合いはないね！！そうかわかったぞ、その不良達も、あんたの差金だな！俺達の作業を邪魔しに来たんだ、そうだろう！？」

とんでもない誤解だったが、彩香にとっては、そんな誤解よりも最初の方の言葉が、衝撃だった。

彩香はゆつくりと、京子の方へ視線を向けた。

「淫乱、私が、淫乱生徒会長ですって……」

京子は、情けない姿の、不良を気取る女子生徒を抱えたまま、首を振った。

「そんなことは、どうでもいいから、早くこいつらを、連れて行かなきゃ！」

「でも、淫乱って……」

うわ言のように繰り返す、彩香の背中を押すようにして、京子は化学室を後にした。

「ああ、そうだ。何をやっているのか知らないけど、終わるまでは、このドアは直さない方がいいかも知れないな。変な誤解は、されたくないだろう？」

ドアを出る時に、京子は中の二人を振り返って、そう言い捨てて行った。

ニヤンニヤンは、まだ腹の下の方を押さえて、ピョンピョン飛び跳ねている捺差内に、軽く背中から抱きつきながら、彼の顔を覗き込んだ。

「誤解されるの、幸司は嫌あるか？」

可愛い少女の両手が、その言葉と共に、科学部長の手に重ねられた。

その手が、下腹部を押さえている手に重ねられたことで、科学部

長の理性は、完全に正常な判断力を失ってしまった。

「えッ？ いや、別に、構わないけど……」

「なら、直させた方が良いあるな。部外者に邪魔されるのは、面白くないあるね？」

「そ、そうだね……」

可愛い少女に、同意を求められて、思わず捺差内は頷いていたが、果して自分の返事が適切なのだろうか、とてつもなく疑問だった。ただ、彼女の体が離れた時、自分が痛みを感じていないことに、彼は気が付かなかった。

そんな夢うつつの捺差内の返事に、少女は笑顔を見せると、荒された準備室の片付けを始めた。科学部長も、慣れない手付きでそれに続いた。捺差内は、この中国娘と生徒会長の間に流れた、この世のものとは思えない緊張の気配を知らなかった。

この時以来、この中国娘が自分のことを、名前で呼ぶようになったことについては、さすがの科学部長もちろん気が付いた。だが、あえて訂正しようとは、彼も思わなかった。

第8節

B 2の正体

ハッキリ言つて、彩香には不愉快だった。

「私は、淫乱と言われたのですよ！」

科学部長が活動の成果を公表する、ことここに至つて、彩香はまだヘソを曲げていた。

上級生の書記長は、やや呆れたように言つた。

「そついうのを、自業自得と言つのです」

そつ言われれば、彩香としては、返す言葉がなかったが、だからと言つて、気が納まるものでもなかった。

校庭には仮設のテントが作られ、その下に並べられたパイプ椅子に、ふてくされた彩香と、他の生徒会の役員達が座つていた。校庭の中央では、デモンストレーションを行なうために、捺差内がニヤンニヤンの手を借りて、パソコンを中心とした機材を並べていた。

この、何かと迫害されることの多い科学部長と、可愛い留学生の組合せに、全校生徒の関心は集まつていた。そのことも手伝つて、放課後だというのに、この学校の生徒と教師ほぼ全員が残つていた。彼らは、校庭の周囲や校舎の窓から、興味津々といった態度で、校庭中央の様子を見守つていた。

「おい、捺差内のやつ、いつの間にあれだけのプラズマ発振器を用意したんだ？」

「それに、ありやなんだ？でっかい発電器か？」

取り巻く生徒達の中には、元科学部の面々も集まつていた。

彼らは、自分達が見放した捺差内が、わずか一週間の間に作り上げた、様々な機器に、驚きの視線を向けていた。もちろん、そのほとんどのを用意したのは、留学生の中国娘だったのだが、元の科学部員達はそんなことを、思いもしなかった。

その留学生と科学部長を、なぜか成行きで、二人の不良女子生徒が手伝っていた。

「何で、あたし達が、こんな目に遭うんだ!？」

「自業自得、なんでしょう……」

自分のしたことを無視した愚痴を聞いて、入学してから不本意なことばかりさせられている女子生徒は、ため息混じりに答えた。元から、この学校で不良のようなことをしていた彼女は、自分達にこんなことをさせている張本人を振り返った。

副会長でありながら、京子はテントの下の役員席から離れたところから、この茶番にも似た光景を眺めていた。彼女は、いつものようにリングをかじりながら、面白くもなさそうな顔をしていた。

「準備できたそうです」

捺差内の合図を見て、下級生の副書記が、彩香にそう報告した。

彩香は面度臭そうに、片手を振った。

「どうぞ、どうぞ、勝手にやっていただいて……」

彩香の投げ遣りな言葉に、書記長は肩をすくめると、下級生に向かって頷いて見せた。

副書記の下級生は、大きく手を振って、科学部長に合図を送った。

「ニャンニャン、やるぞ!」

「いつでも、いいある……」

捺差内の、緊張した声に答えたニャンニャンは、心の中で捺差内に詫びていた。

『幸司、ごめんある……マックス、用意はいいあるか?』

『OKです、ニャンニャン』

自分を手伝ってくれた留学生が、何を考えているかも知らずに、捺差内は機材の電源を入れた。

何台かのプラズマ発振器が不気味な唸りを生じ、その表面に映像を浮かび上がらせた。

「レーザー、照射!」

捺差内の合図に、ニャンニャンが手元のキーボードを操作した。

プラズマ発振器が、単なるモニターからプロジェクターに変わり、校庭の中空に、立体映像を結んだ。

おおッ、というどよめきが、周囲の生徒や教師達から上がった。テントの下でつまらなそうに、頬杖をついていた彩香も、おやおやと顔を上げた。

「いったい、あれだけの映像を維持する電力は、どこから持ってきたんだ？」

「やっぱり、自家発電じゃないの？」

捺差内を見限った科学部員達は、実現不可能と思っていたことが、目の前で可能になっていることを目撃して、驚きに顔を見合わせていた。

他の生徒達は、予想以上のアトラクションに、単純な歓声を上げていた。

空中に浮かび上がったのは、巨大な航空機の姿だった。そういうことに、関心のある生徒は、それがB2と呼ばれる、近未来型の戦略爆撃機に似ていることが、すぐにわかった。

「ここまでは、単純な立体映像だ。もし、捺差内のB2モードが、本当に完成したのなら……」

科学部員達は、次の変化が本当に起こるのか、ゴックリと唾を飲んだ。

捺差内は、どよめく観衆に気を良くして、ニヤンニヤンを振り返った。

「さア、ニヤンニヤン、会長と生徒会に、目にもの見せてやろう！」

「OK、やってやる、あるネ！」

捺差内に答えると同時に、ニヤンニヤンは心の中で呟いていた。『幸司、悪いけれど、見せるだけでは終わらないある……』

捺差内が、キーボードを叩いて、システムを作動させると、発振器がより一層の唸りを上げた。

それまで、透けるような立体映像だった、校庭の上の爆撃機の姿が、ハッキリとした厚みを持つ映像に変わった。すると、一段と輝

きを増した。

「やりやがった、本当に、B2モードを、完成させたんだ！」

「すっごいぞ、捺差内！」

科学部の連中からも歓声が沸き起こる中、校庭上に現われた爆撃機は、ゆつくりとその姿を換え始めた。

「なに、あれ！？」

「やだ、悪趣味！」

変換された映像の姿形が、明瞭になるに連れ、特に女子生徒からそんな声が上がった。

爆撃機は、複雑な変形のプロセスを経て、一目でそれとわかる、グラマラスな体型をした、金髪の女性型ロボットの形をとり始めた。「趣味の悪さは別として、この成果は、素直に認めるしか、ありませんね」

驚きの表情を隠そうともせずに、書記長はそう言つて会長を振り返った。

しかし、薄い唇の端を微かに歪めた彩香は、まったく別の言葉を口にしていた。

「なるほど、そういうことですか……」

書記長には、会長の得心したような表情が理解できず、むしろ何か悪い予感を感じて、背筋が寒くなった。

書記長が、校庭の上空に目を移すと、よくあるSF誌の扉を飾られるような女性型ロボットは、ほぼ完全な形で校庭の中心に立ち上がっていた。その頭は、校舎の三階部分に届いていた。

観衆のどよめきの中、ロボットはゆつくりと足を上げると、生徒会の役員がいるテントに向かって歩き始めた。ロボットの動きに有頂天になっていた捺差内は、自分の傍らにいたはずの留学生が、ゆつくりと後ろに下がったことに気が付かなかった。

『ギガ・マックス！』

ニヤンニヤンは、周囲の誰にも聞こえない声で、そう叫んだ。

そんな、中国娘の動きに気が付いたのは、この派手なアトラクシ

ヨンには、最初から余り興味のなかった京子だった。京子は、精神安定剤代わりのリングをかじるのを止めて、留学生の方を見ていた。彼女は、その中国娘の変化を、ついこの間目撃したばかりだった。

ニャンニャンの体が、金色に輝きはじめた。やがてその輝きは、唸りを上げて動いている機材に移って行った。

捺差内は、自分の目の前のモニターが、異様な輝きを放つの見て、初めて事態の変化に気が付いた。

「なんだ、どうした？ニャンニャン！？」

慌てた捺差内が振り返った時には、すでにニャンニャンの姿は、そこにはなかった。

「危ない！科学部長、電源を切れ！！」

リングを放り出した京子は、そう叫んで、捺差内の方へ走った。

その時、生徒会のテントに近付いた巨大な女性型ロボットが、急に金色の光に包まれた。そうかと思うと、それまでとは、うって変わった素早い動きで拳を振り上げ、振り降ろした。

とつさに、彩香は片手を差し上げて、テントの直前で、その大きなロボットの腕を止めた。

「桃山さん、みなさんを早く！」

会長の短い言葉に、名前を呼ばれた書記長は、何が何だかよくわからなかったが、その緊急性だけは、充分に理解していた。

「逃げなさい！急いで！！」

とつさに、何を言われているのか、生徒会役員達にはまったくわかっていなかった。それでも、目の前のロボットが、もう片方の腕を振り上げた時には、本能的な恐怖を感じて、我先にテントを飛び出した。

全員が逃げ出したことを、確認しようとししないで、彩香は、押さえていた力を外した。巨大なロボットの腕は、生徒会のテントを押し潰し、中のパイプ椅子やスチール机を、粉々に砕いた。

「これが、B2の正体か？捺差内のやつ、とんでもないものを作ったな……」

「なに、感心してんだ！早く逃げないと、こっちも巻き込まれるぞ！！捺差内のやつ、マジに会長に喧嘩を売りやがった！！」

「これで、本当に、科学部は終わりだ……」

事情を知らない元科学部員は、事態の思わぬ展開に驚くやら、感心するやら、嘆くやら忙しかった。

それでも結局は、彼らも逃げ回る生徒の群れに混じることに、代わりはなかった。

第9節

ニャンニャンの陰謀

自分の考えとは、まったく違った展開に、捺差内はただ呆然と、校庭の片隅にたたずんでいた。

そんな科学部長に駆け寄った京子は、その横ッ面を軽く叩くと、彼の意識を正気に返させた。

「早く、電源を切るんだよ！」

「切っております……」

捺差内は、手元のキーボードを操作しながら、うつろな表情でこの喧嘩早い副会長を、見返した。

正面のいくつかのモニターには、京子には理解できないメッセージが、次々と表示されていた。

「なら！ケーブルを外せばいいじゃないか！？」

そう言うのと、京子は手近なケーブルやコードを、次々に引き千切りはじめた。

そんな京子の乱暴なやり方に、捺差内は悲しそうな表情を浮かべたが、やがて、自分も主電源のコードを抜いた。しかし、金色に輝く巨大ロボットがその動きを止める気配はなく、それを作りだしている機材の唸りも、鳴り止もうとはしなかった。

短気な京子は、プロジェクターとなった発振器をブチ壊すべく、蹴り上げた。しかし、金色の輝きが見えない壁となって、その足の動きを受け止めた。

「電気が、エネルギーが、別のところから、送られている……」

様々な操作をした挙げ句、捺差内はそう結論した。

その悲し気な科学部長の表情から、京子は、これがもはや、この男の手を離れた事態だということを、ハッキリと悟った。

「ニャンニャンは、あの中国娘はどうした！？」

京子の言葉に、捺差内は慌てて周囲を見回した。校庭のどこにも、その可愛らしい少女の姿は見えなかった。

京子は、舌打ちをした。すべては、あの娘の企みだったということとが、ハッキリしたのだ。

「京子さん！聞こえます！？」

校庭の真ん中で、巨大なロボットの攻撃を食い止めながら、彩香が京子を呼んだ。

「このロボットさん、このままでは、過負荷で暴走するか、爆発してしまいます。早く、発生装置を止めて下さい……」

砂塵を巻き上げながら、彩香は見えない力で、巨大なロボットの動きを押さえていた。

そんな生徒会長に、京子は怒鳴り返した。

「そんなこと言っただって、こっちも、どうにもならないんだよ！」

「それなら、仕方ありませんが、このロボットが爆発したら……」

「爆発したら？」

「学校だけでなく、この街全体が、消し飛びますわ……」

「何だって!？」

京子は、彩香の言葉に驚いたが、すぐに気を取り直すと、傍で果然としている、科学部長の胸ぐらを掴んだ。

「おいッ、何とかしろ！」

「そんなこと言っただって、どういうわけか、映像が実体化しているんだから……何かが、エネルギーを変換しているんだ」

困惑し切った捺差内から手を離れた京子は、再び周囲を見回した。

「それとも、誰かがつてわけか……」

「誰かって、まさか!？」

その時、逃げ出した女子生徒の一人が、悲鳴を上げて空を指差した。周囲の他の生徒や教師も、その方向を見上げた。

ちょうど、校庭の真ん中で争っている、彩香とロボットを見おろす形で、校舎の屋上の柵の上に立つ、金色に輝く人影があった。

「ニャンニャン！」

期せずして、数人が同時に叫んだ。

同じように人影を見上げて、捺差内はゴックリと喉を鳴らした。振り返ると、自分の隣りにいた副会長の姿が、校舎の中に駆け込むのが見えた。慌てた科学部長も、何がなんだかわからないままその後を追った。

校庭では、巨大ロボットが彩香に掴み掛かり、彩香が人間離れした跳躍で、その手をかわしたところだった。地響きが校庭を揺るがし、ロボットの両手が地面をえぐった。

その中で、京子は一目散に屋上めがけて、駆け上がった。その速度に、捺差内が追いつくはずもなかった。

「ニャンニャン、あのデカブツを、止める！」

屋上に駆け上がった京子は、息を切らしながらも、柵の上に立つ少女にそう叫んだ。

金色の光に、内側から輝く留学生は、微かに首を曲げると、背後の京子の方を向いた。

「邪魔しないで、欲しいあるネ。これ、ニャンニャンの大事なテストある。止めるわけには、行かないあるよ」

「テストだと？そんなことのために、街一つ、道連れにするのか！？」

京子の言葉に、ニャンニャンは微かに笑った。

「もし、ミス・サイカがこのまま負けてくれなければ、そうなるても、仕方ないある。あの人の強さは、まともじゃないある」

「それは、認める。彩香はまともじゃない。だから、街が吹っ飛んでも、あいつは痛くも痒くもないぞ！あいつに、そんな脅しは無駄だ！――」

「そうかも、知れないある。世界最高のサイキッカー、彩の姫巫の名は、ダテじゃなそうあるね……」

その時京子は、この中国娘が、なぜか嬉しそうに微笑んだように思えた。

京子は、ニャンニャンに詰め寄った。

「それが、わかつているなら！」

「無駄ある、ミス・キョウコ、それ以上近付くと、あの人の命、ただでは済まないあるね」

ニャンニャンに近付こうとしていた京子は、その言葉に足を止め、金色に輝く物騒な娘が、顎で示した方を向いた。

屋上の柵の外側に、わずかな建物の縁がある。その上に、ほとんど、空中に浮かぶような形で、立っている人影があった。

「叔父様！」

それは、京子の叔父であり、彩香の夫でもある、美術講師の高野透だった。

透は意識がないのか、ピクリとも動かなかった。

「ミス・サイカに対する切札あるが、あなたにも、効果があるあるネ？」

「卑怯な……」

「では、黙って、見ているよろし。私の任務は、あくまでも、ミス・サイカの抹殺だけある。他の人に、危害を加えるつもりはないある……」

そう言つと、ニャンニャンは再び校庭で暴れるロボットに、注意を向けた。

その時、ようやく科学部長が屋上に駆け上がって来た。捺差内は、叔父を人質に取られた副会長の肩が、微かに震えはじめるのを見た。やがて捺差内は、京子が体を曲げて笑いだしたのを知って、立ち尽くした。京子の神経が、おかしくなったのかと思つたのだ。

京子は、さらに激しく笑いはじめた。

「何がおかしいある!？」

その耳障りな笑い声に、とうとうニャンニャンが、再び振り返つた。

笑いながら、京子はその中国娘を指差した。

「あんたは、自分で自分の首を締めたんだ。叔父様に手を出したことを知つたら、彩香はもう遊んではいけないよ！」

そう言つて、さもおかしそうに京子は笑つた。

その京子の言葉は、ひどくニャンニャンを傷付けた。彼女は、表情を変えて京子を睨んだ。

そんなニャンニャンの背後に、下からゆっくりと浮き上がって来る人影があつた。

第10節

彩の姫巫　さいのひめみこ

屋上近くの空中に、何事もないかのように平然と、荒神彩香が浮かんでいた。彼女は、メタルフレームの眼鏡の奥から、冷めた視線を向けていた。

天下無敵の人妻女子高生、世界最高のサイキッカーは、頭の後ろの赤いリボンをゆつくりと解いた。長い黒髪を束ねていたりボンが解け、彼女が軽く首を振ると、まるで夜の闇が広がるように髪は空中に散った。

「ニャンニャンさん、お遊びが、過ぎますわよ……」

「サイカ！」

驚いて振り返ったニャンニャンは、校庭の上で、自分が操っていたロボットがうずくまったまま、動きを止めていることを知った。

だが、動きが止まっているのは、ロボットだけではなかった。その、異様な気配にニャンニャンは、初めて狼狽の表情を浮かべた。

「いったい、なにしたあるね？」

「ちよつと、時間の流れを、逆にさせていただきました」

「時間！？」

ニャンニャンは、再び、校庭の生徒達に目を凝らせた。生徒達はある者は口を開け、ある者は走りだしたまま、中途半端な格好で止まっていた。

よく見ると、その校舎の屋上から目に見える範囲で、動いているものはなかった。空を飛んでいる鳥さえ、そのまま空中に浮かんだまま動かなかった。

「時間が前に進むのと同じだけ、この辺りの私達だけが、過去に遡っているのです……」

『マックス、マックス！聞こえる！？返事する、よろしー！』

ニャンニャンは、声に出さずに呼びかけたが、目に見えない相手からの返事はなかった。

空中に浮いたまま彩香の長い髪が、徐々に不思議な輝きを放ちながら、逆立って行った。彼女はその薄い唇の端を歪めて、微かに笑った。

「無駄ですわ、ニャンニャンさん。いえ、サイバー・ウェポン、コード・ナンバー・N2とお呼びした方がよろしいかしら？」

ニャンニャンは、はじめて恐怖していた。自分よりも、圧倒的に強力な存在があることを、この時、生まれて初めて、思い知らされたのだった。

ニャンニャンは自分の体から、金色の輝きが次第に衰えて行くことに、気が付いていなかった。

「本体からの、エネルギーの転送がなければ、あなたは活動が出来ないのでしょう？」

そう言うのと、彩香はさもおかしそうに笑った。

それは、彼女と最も親しいはずの京子でさえ、背筋が寒くなるような、魔女の笑いにも似ていた。

「サイカ、あなたはいつたい……」

「あらゆる呪術や占術、魔術や妖術を操る荒神一族の末裔。一族最高の能力者、彩の姫巫こと荒神彩香。超能力だろうと、魔力や妖力だろうと、そいつに不可能はないのさ。忌々しいことだけだね……」

ニャンニャンの背後で、本当に忌々しそうな顔をしながら、そう言うのと、京子はポケットからリングを取り出して、一口かじった。

これによって、京子は直情的に爆発する自分の感情を、かろうじて押さえていた。

そんな京子の方に、向きを変えようとして、屋上の柵の上のニャンニャンは、バランスを崩した。彼女は、自分の体が、思うように動かなくなったことを、この時はじめて知った。

鈍い音と共に、少女の体は屋上の上に倒れた。

「虚構の存在に質量を与えて、自由に動かすくらいのアトラクシヨ

ンなら、幾らでも付き合つて差し上げます。けれど、わたくしの大切な方を人質に取るというなら、お遊びとは言えません。それなりの覚悟を、していただかないと……」

そう言った彩香は、メタルフレームの眼鏡を外した。その度無しの眼鏡は、普段の生活で自分の眼力が他人に余計な影響を与えないための、彼女なりの気遣いだった。

眼鏡の下からは、冷たい光を帯びた黒い瞳が現われた。彩香は、それを京子の方へ向いた。

「京子さん、先生をお願い……」

頷いた京子は、柵の外の透を抱き上げた。

透の体は硬直していたが、胸の動悸は正常だった。京子は、エイツと活を入れた。微かな呻き声を上げて、透は意識を取り戻した。その様子を、優しい眼差しで見守っていた彩香は、屋上に倒れて苦し気に呻いているニャンニャンに、視線を移した。

やや吊り上がったようにも見える彩香の両目は、その黒い瞳の中に少し哀し気な色を浮かべていた。

「本来、この世にあるまじきモノ、その、元の姿に還れ！」

そう言った彩香が、天に向かって片手を差し上げ、人差し指を突き出した。その指に、天から細い光の筋が、落雷のように落ちた。髪をユラユラと逆立てた彩香は、ゆっくりとその指をニャンニャンに向かって、振り降ろした。

「よせ！やめろ！！」

突然、若い男が叫び、彩香とニャンニャンの間に飛び込んだ。その男の背中に、彩香の指からほとばしった青白い光が、突き刺さった。

科学部長、捺差内幸司は、その体で留学生の体をかばった。だが、彩香の放った光は、捺差内の体突き抜けて、ニャンニャンを襲った。

激しい悲鳴が、中国娘の口から響き渡り、その体は激しく痙攣した。

第11節

単純な想い

空気すら動かない学校の屋上で、異様な光景が展開していた。

屋上の柵の外の空中には、怪しく光る髪を逆立てた彩香が、恐ろし気な表情のまま浮かんでいた。屋上の柵のなかでは、京子が透を抱き支え、捺差内がニャンニャンを、その体の下に抱きしめていた。耳を覆いたくなる悲鳴を発しながら、中国娘は海老のように、激しく体を折り曲げたり伸ばしたりを繰り返した。捺差内は、そんな少女の体を必死に抱えた。

「だいじょうぶか、おいッ、ニャンニャン、しっかりしろ！しっかり……」

可愛い少女の苦痛に、成す術を知らない科学部長は、空中に浮かぶ生徒会長を振り返った。

「何てことをするんだ！ニャンニャンには、何の罪もないじゃないか、やるなら、この俺をやれ！！なんで、こんな可愛い娘に、こんな酷いことをするんだ！？」

それは、完全に的外れな、一方的な捺差内の思い込みに過ぎなかった。だが、その余りに単純で感情的な怒りが、同じく直情的に怒っていた彩香に、微妙な反応を与えた。

京子は、彩香の長い髪がその禍々しい発光を止め、元の通りになるのを見た。柵の外の彩の姫巫の体は、ゆっくりと柵を越えて屋上に入ってきた。

京子は、ホッと胸を撫で下ろした。

「科学部長さん。あなた、その娘が何者で、何をしたのか、御存知なのですか？」

彩香の表情は険しかったが、その目は先ほどのように吊り上がってはいなかった。

「この娘は、ニャンニャンは、俺のために、手伝ってくれたんだ。俺が、あんたをやつつけるために、力を貸してくれたんだ！ただ、それだけだ！！あんたを恨んだのは、憎んだのは、俺だ！痛めつけるんなら、俺にしてくれ！！」

純情と言うには、余りにも直線的で、自分勝手な思い込みだった。それだけに、単純に胸を打つ響きがあった。

どちらかと言うと、シラケ気味に彩香は京子を見返した。本来、このような感情の相手は彩香ではなく、京子のもだった。

「もう、そのくらいでいいだろう。彩香、いや、荒神生徒会長……」

そう言つて、屋上に降り立った彩香と、留学生の体を抱く科学部長の間に入ったのは、その留学生に捕らわれていた美術講師だった。気を失っていた彼には、事情はさっぱりわからなかった。ただ、自分のことで、彩香が我を忘れて無茶をしたということだけは、おおよそ察しがついていた。

「先生まで、そうおっしゃるなら……」

そう言つと、彩香は自分の長い髪を頭の後ろで束ねて、再び赤いリボンで結んだ。

その時、それまで固体のように動かなかった空気が動き、風が校舎の屋上を吹き抜けた。

第12節

N2の生みの親

校庭では、生徒達の悲鳴や歓声が再び起こり、街の喧騒が遠くから響いて来た。

しかし、校庭にうずくまった巨大ロボットは、そのままの姿だった。やがて、次第に、そのロボットの色が透けるように薄くなり、徐々に消えて行った。

逃げ惑っていた生徒達も、その変化に気付くと、恐る恐る、ロボットの方へ体を向けていた。

「機械が、止まっている……」

立体映像を作り出していた、プラズマ発振器をはじめ、科学部長が苦勞して用意した数々の機器が、すべて動くの止めていた。

やがて校庭は、何事もなかったかのように、静まり返った。

「ニャンニャン、ニャンニャン、すっかりしろ！」

周囲の変化に、気を取られていた京子は、そんな捺差内の言葉に、視線を屋上に戻した。

彩香によって、生まれて初めての衝撃を受けたニャンニャンは、小刻みな痙攣を繰り返していた。

「ともかく、医務室へ！」

その美術講師の言葉に促されるように、捺差内は中国娘を抱えたまま立ち上がると、昇降口に向かった。

その時、いつの間にかその入口に、一人の老人の姿があった。その老人は、医者のような白衣を着ていた。

「ニャンニャンを、N2を、こちらに渡していただきたい……」

「なんだ、あんたは!？」

ニャンニャンをかばうようにして、捺差内が睨んだ。

「わしゃ、その娘の保護者じゃ。言わば、親代りみたいなものじゃ

……」

京子と透、そして捺差内は顔を、お互いに見合わせた。
いつもの、優等生然とした態度に変わった彩香は、老人の前に進み出た。

「ドクター・チャンで、いらつしやいますね？」

「いかにも。さすがは彩の姫巫、すべてはお見通しか……」
そう言くと、老人は寂しそうに笑った。

その時、微かにニヤンニヤンは、目を覚ました。そして、混乱する意識の中で、老人の名前を聞いた。

「ドクター、私、連れに来た。嫌、私は、嫌、処分は、されたくない…… 幸司、助けて……」

そついう微かな声と共に、留学生は自分を抱く科学部長の胸を、弱々しく掴んだ。

その声に頷いた捺差内は、ゆっくりとその場から遠ざかった。

「あッ、これ、ニヤンニヤン、違うんじゃ、わしゃお前を……」

自分の娘のようなニヤンニヤンを抱いた男が、ゆっくりと後ろに下がるのに気付いた老人は、慌てて呼び止めた。

京子達も、捺差内の方を振り向いた。

「ダメ、来ないで！お願い、幸司、逃げて……」

だが、捺差内が逃げた方向には、屋上の柵しかなかった。

科学部長は、たちまち逃げ場がなくなったことを知った。

「ダメだ！ニヤンニヤンは、誰にも渡さない。俺が、俺が、守る！」

「違います。科学部長、この方は……」

「寄るな！」

穏やかに誤解を解こうとした彩香は、頭から捺差内にそう言われて、やや感情的になった。

とりわけ捺差内に対して、例の「淫乱会長」発言以来、この表面的には優等生で通している生徒会長は、良い印象を持つはずはなかった。そんな彩香の感情の変化を察して、ニヤンニヤンは、再び捺

差内の胸にすがった。

「幸司、柵を越えて、飛び降りて！お願い！！」

一瞬、捺差内は背後の柵越しに、はるか遠くの校庭を見て、顔色を変えた。

「幸司、お願いよ、私を信じて、お願い……」

再度、弱々しい声で、可憐な少女は科学部長の腕にすがった。そして、再び激しく痙攣して、仰け反った。

その痛々しい姿と、悲鳴に促されるように、ついに意を決した科学部長は、自分の前の四人を見渡し、震える声で叫んだ。

「いつの時代にも、お前らのような横暴と無理解が、俺達のような純真な恋人同士を、追いつめるんだ！自分達が何をしたのか、後で知って後悔しても、もう遅いんだ……」

いつたい、いつから、お前らは恋人同士になったんだよ！思わず、京子は顔を押しえた。もちろん、彩香にも何でそうなるのか、理解できるはずはなかった。彼女は、思わず小首を傾げていた。

いつの間にか、悲劇の主人公になってしまった捺差内は、少女との心中を決意すると、柵に手を掛けてよじ登った。

「さらば、諸君！我々の愛は、永遠だ！！科学部、万歳！」

わけのわからないことを叫ぶと同時に、柵の上に身を乗り出そうとした捺差内だったが、土壇場でその高さに怯えた。思わず柵を掴もうとして、彼の体はバランスを崩した。

腕に抱きしめた少女から、手を放さなかったことはさすがと言うしかなかった。だがそのために、科学部長は無様な格好のまま、地面に向かって落下して行った。

運が良いのか悪いのか、それは校庭側に対して、校舎の裏側となり、人影がなかった。だから、他の生徒がその様子を目撃することはなかった。

「しまった！」

京子は叫んだが、一步遅かった。柵に飛びついた京子は、彩香を振り返った。彩香が何かの方法で、助けることを期待したのだった。

だが、彩香は肩をすくめて首を振った。驚いた京子は、慌てて視線を地面に戻したが、そこにはどこにも落下したはずの二人の姿がなかった。

「消えた!？」

京子の隣りで、透が驚きの声を上げた。

彼は、落下する途中で、二人が虹色の光に包まれて、消える瞬間を目撃していた。

「マックスが、転送しおった。じゃが、あの体では、そう遠くへは行っておるまい。すぐに、見つかるじやろう……」

京子達の背後で、白衣の老人はそう言って、小さなため息を吐くと、夕焼けに染まる空を見上げた。

事情がわかっているのか、微かに頷いた彩香と違って、京子とその叔父は、顔を見合わせるだけだった。

第13節

サイバー・ウェポン

目が覚めた時、捺差内は見慣れた化学準備室にいた。

ニャンニャンを抱いて、もはやこれまでと屋上から飛び降りたはずだったが、あれは夢だったのかと、頬をつねった。

「いてッ！」

彼は、そう叫ぶと体を動かした。その時、自分が何やら重いものを腹の上に乗せていることに、この科学部長は遅まきながら気が付いた

「ニャンニャン！」

捺差内は、間違いなくしっかりと、留学生の可愛い体を抱いていたのだった。慌てて、この思い込みの激しい、純情な科学部長は、少女の体から自分の体を離れた。

機材を校庭に持ち出したために、いやに広々とした準備室の中で、防火用の汚れた毛布を丸めると、捺差内はニャンニャンを寝かせた。さらに、隣の化学室から、水で濡らしたタオルを持って来ると、科学部長はこの不思議な力を持つ中国娘の額に乗せた。

タオルの冷たい感触に、娘はその青い瞳を開けた。

「幸司……」

「だいじょうぶ、誰にも俺達の仲は引き裂けないよ……」

相変わらず、激しい思い込みで、勝手なことを言う捺差内に、ニャンニャンは微笑んだ。そして、その言葉を訂正しようとはしなかった。

「幸司、わたし、好きか？」

「もちろんさ、二人の愛は、永遠だよ！」

他人が聞いたら、赤面するだけでは済まないようなセリフを、堂々と言つてのけた科学部長は、少女の両手をしっかりと握った。

ニャンニャンは、そんな捺差内に、寂しそうな微笑を向けた。

「幸司、知らない。知ったら、そんなこと、言えない……わたし、ニャンニャン、N2、人間違う……サイバー・ウェポンある」

「サイバー・ウェポン？」

捺差内には、ニャンニャンの言っている言葉の意味が、わからなかった。

中国娘は、再び寂し気な微笑を浮かべた。

「私の体、人間に似せて、人工的に作られた、戦闘用生体ユニット……私の本体、この空の上、大気圏外にあるあるね……」

そしてニャンニャンは、ゆっくりと、自分が二番目の開発ユニットであることを話した。彼女は、自分のコード・ネームがN2であること、兵器として開発されたということを、わかりやすく説明した。

最初、捺差内はSFマニアでありながら、容易にそのことを信じようとはしなかった。

「手を触れずにものを持ち上げたり、高いところへ飛んだりするくらい、生徒会長や副会長なら、いつもやっている……」

彼にとって、いや、この学校の生徒にとって、そのような現象は確かに珍しくも何ともなかった。そういう意味では、この科学部長の判断は、あながち間違いとも言えなかった。

ニャンニャンは、楽しそうに笑って、そのための苦痛に顔を歪めた。

「こんな、学校だから、そんな幸司だから、いつの間にか私も、自分が兵器だということ、忘れていた……幸司とシステムを作るの、とても楽しかった……でも、ニャンニャン、人間でない。人間の道具、役に立たなければ、処分される……ウッ!？」

ニャンニャンは、再び体を痙攣させた。

捺差内は必死になってその手を握り、娘に呼びかけた。

「ニャンニャン、ニャンニャン! しっかり、しっかりしろ!」

「幸司、B2を利用して、ごめん。あれは素晴らしいシステムある、

きつと幸司なら……」

「いいんだ、B2なんて、どうでもいいんだ！B2が駄目なら、B3、B4、幾らでも作ればいい！ニャンニャンさえいれば、幾らでも作れる、そうだろう！？」

苦痛に堪えながら、ニャンニャンは皮肉な笑いを受べた。

「そう、幾らでも作れる。私が駄目なら、N3やN4が……」

「駄目だ！ニャンニャンは、ニャンニャンだけだ！君の代わりを作るんじゃない、君と一緒に作るんだ！！」

激しい痙攣に顔を歪めながら、ニャンニャンはそれまでとは違う激しい力で、捺差内の手を握り返した。

「ニャンニャンも、ニャンニャンも、幸司と作りたい！一緒に、作りたい……」

そう言つと、少女の青い瞳から、涙が溢れた。

次の瞬間、N2ことニャンニャンの体は、さらに激しく痙攣した。それは、どんなに捺差内が押え込んでも、その腕から飛び出すほど、激しいものだった。

やがて、その動きが納まるに連れ、次第にニャンニャンの体が透き通り、消えて行つた。

「ニャンニャン、ニャンニャン！ニャンニャーン！！」

科学部長は、そう叫びながら、中身の消えた制服を抱きしめていた。

「行つて、しまいましたわね」

涙にくれる捺差内の背後で、そんな声が聞こえた。

驚いた捺差内が振り返ると、そこには彩香と京子が立っていた。

「この人殺し、貴様が、貴様が！」

感情を爆発させた捺差内は、涼しい顔をしている彩香に飛びかかった。

だが、彼女はすつと身をかわし、勢い余つた科学部長は、化学室の机に無様な形で体当たりしただけだった。

「人殺しとは、乱暴な……あなたも、お聞きになつたでしょう？彼

女は、サイバー・ウェポン、人間ではありませんのよ」

「それが、どうした！お前達だって、人間離れしているじゃないか、彼女とどこが違う？だいたい、同じようなお前らが、平気で普通に生徒会やっているのに、純真で可憐なニヤンニヤンが、科学部をやっている何がいけない！？」

およそ、まともな論理展開ではなかったが、変態オタクと蔑まれ続けた男の純情は、それなりに胸に響く、真剣なものがあつた。

オイオイと、人目もはばからずに泣き出した科学部長を前に、京子と彩香は、顔を見合わせるしかなかった。

「そんなに、好きだったのか？」

涙でクシャクシャになった捺差内に、生徒会長達の背後に立っていた美術講師が、ハンカチを差し出した。

彼も彩香達と一緒に、化学室に来ていた。ただ、捺差内の余りに激しい剣幕に押されて、今まで後ろに下がっていたのだ。

「わからない、でも、楽しかったんだ。あの娘といっしょに、システム作って、俺は、会長や生徒会なんて、どうでもよくなったんだ。こんなことなら、あんなシステム、完成させなきゃ良かった！」

そう言って、捺差内は透に借りたハンカチで盛大に鼻をかむと、ありがとうと言って、それを返した。

さすがの透も、そのハンカチを受け取ると、そのままポケットには入れられず、そっと、背後のゴミ箱に捨てた。

「彩香、ドクターのところへ、行けるかい？」

透の言葉に、彩香はヤレヤレといった表情を作った。

「それは、行けないことは、ありませんけど……」

「なら、ちよっと、連れて行って、やってくれないか？」

「でも、この人は、わたくしのこと、淫乱生徒会長って……」

口を尖らせる彩香の頬に、透はそっと頬を寄せてささやいた。

「別に構わないじゃないか、僕は淫乱な位の方が良いと思うよ」

「もう、先生つたら……！」

たちまち彩香は、耳まで赤くなると、そんな透の足を思いつきり

踏んだ。

思わず顔をしかめた透から離れて、彩香は座り込んだままの、捺差内の方へ歩み寄り、片手を差し出した。

「これだけは、約束して下さいな。ニャンニャンさんの、本当の姿を見ても、決して、後悔しないと……もし、この約束を破ったら、あなたを成層圏の外へ、放り出さなくてはなりません……」

そんな彩香の、穏やかだが、厳しい意味の言葉に、思わず捺差内は息を飲んだ。

しかし、その直後に意を決すると、変態オタクの科学部長は、差し出された生徒会長の手を取って、立ち上がった。

「約束する。愛するニャンニャンの、どんな姿を見ても、後悔しない！」

それを聞いて、彩香はニツコリ微笑むと、背後の京子と透を振り返った。

透は軽く頷き、京子は、またかじりかけのリンゴを喰わえた。

「後のこと、お願いね」

そう言った彩香は、片手を軽く振った。慌てて、捺差内はニャンニャンの残した制服を胸に抱いた。

その直後、部屋の中につむじ風のような、渦巻く風が起こり、周囲の物を巻き上げた。

それが収まって、紙などがヒラヒラと、机の上に舞い落ちて来た時には、既に彩香と捺差内の姿は、どこにもなかった。

「本当に、だいじょうぶなの？サイバー・ウエポンとかの、正体を見せて、発狂すんじゃない？」

リンゴをかじりながら、京子は叔父である美術講師に尋ねた。

透は、肩をすくめて見せた。

「わからないよ、そんなことは。でも、それを見ても、なお、気持ちが変わらないなら、あの二人の仲は本物だろう。たとえば、いきさつは何であれ……」

「彩香と、叔父様の時みたいにな？」

京子の、そんな、やや意地悪気な質問に、叔父である美術講師は
敢えて、答えようとはしなかった。彼は、化学室に背を向けると外
へと向かった。

もしニャンニャンが、再びここへ戻って来るようならば、教師と
して用意するべき手続きが、色々とあるのだった。京子は、そんな
叔父の背中を見ながら、ため息を一つ吐くと、リンゴをかじりなが
らその後続いた。

後には、主もなく機材もない準備室のドアが、寂し気に、開いた
ままになっていた。

第14節

ギガ・マックス

地表から遠く、成層圏の少し上あたりに、海を泳ぐ大きなエイにも似た、真っ黒で巨大な飛行物体が浮かんでいた。その飛行物体の名はギガ・マックス。戦闘用生体ユニット・N2、通称ニャンニャンの本体だった。

比べるものがないので、その大きさはちよつとわかり難かったが、地上に下ろせば、最新式の屋内球場の二倍以上はあった。

「だいたい、人間の姿形はしていても、兵器である生体ユニットを、自分の孫娘に似せたりするから、こんなことになるのだ！ いいかね、ドクター。これは、N2に疑似人格を与えた、君の責任だぞ！」

その、巨大な飛行物体の中の制御室で、地上通信用のモニターに写る髪の薄い小男は、憎々し気にそう言った。

そのモニターの前で、ドクターと呼ばれた白衣の老人は、ゆつくりと首を振った。

「人格を持たない生体ユニットなど、単なるデク人形、ロボットに過ぎん。それでは、人間の中に入って活動することなど、出来んじやろう。人間と同じ動き、同じ感情、同じ判断が出来なければ、生体ユニットなど、グロテスクなりモコン人形じゃ……」

博士の言葉に、制御室は不気味な沈黙に包まれた。

モニターの中の小男は、何かを言おうと口を動かしかけたが、やがて薄い頭を手で撫で回すと、表情を変えた。

『ドクター、マスターに危険な感情が見られます。注意して下さい』
制御室内に、以前にニャンニャンに話しかけたのと、同じ声が響いた。

その声に、老人は頷きで答えた。

「どうやら、博士とは、根本的なところで、見解の相違があるよう

だ。実に、残念だよ……考えてみれば、こちらの存在を彩の姫巫に知られてしまったのだな。そうなれば、そのギガ・マックスも安全とは言えない。むしろ、そこから、こちらの存在まで知られたりしては、大迷惑だ。あなたの頭脳と、大金をつぎ込んだギガ・マックスは惜しいが、背に腹は変えられんな……」

「どうするつもりじゃ？」

「なに、心配はいらん。ここまでの、計画に関するデータは、すべてこちらにもコピーがある。あんたも、早く、本当の孫娘に会いたいだろう？」

小男の顔は、破壊と殺戮を好む者特有の、陶醉感に酔っており、その目には、冷徹で凶悪な光が宿っていた。

老人は、自分の命が、風前の灯火であることを知った。

「このギガ・マックスの防衛能力を、知らんわけでもあるまい？」

「よく知っている。だが、N2を再生中であれば、マックスの機能は、それに集中して、防御シールドは張れまい？もし、N2の再生を諦めるのなら、我々には、まだ話し合う余地があるのではないかな？」

そう言つと、モニターの中の小男は、嫌味な笑い声を残して、通信を切った。

白衣の老人は、そのモニターの前で、ガックリと肩を落とした。

『ドクター、何かが、機内に侵入しました！』

マックスと呼ばれたモノの声は、日頃の冷静さからは、かなり離れたものだつた。

老人は驚いて、振り返った。すると、その目の前に風が巻き起こり、老人の目を塞いだ。

『侵入者発見、ただちに排除します』

「待てマックス、そんなことをしても無駄じゃ、そうですな、ミス・サイカ？」

成層圏の上、ほぼ真空の宇宙空間に浮かぶ飛行物体の中心に、まるで隣りの家でも訪問するような調子で、彩香は捺差内と共に姿を

現わした。

もつとも、とつさのことで、捺差内は自分が今どこにいるのか、よくわかつてはいなかった。ただ、その彼の手には、しっかりとニヤンニヤンの制服が握られていた。

さすがは、変態オタクの科学部長というところだったが、彼の場合、それは決まっていかがわしい意味ではなかった。捺差内は、純粹に本人に返すつもりで、それを持って来ていたのだ。この辺り、この科学部長は単なる変態オタクと言うには、余りにも単純と言うか、純粹だった。

そんな捺差内だからこそ、彩香や透にも見捨てらずに、ここまで来れたのかも知れない。もつとも、そのことが、彼にとって本当に良かったかどうかは、また別の問題だろう。

「突然お邪魔して、申し訳ありません。ドクター・チャン。この人が、どうしてもニヤンニヤンさんに、お目に掛かりたいと言うものですから……」

彩香はそう言うと、キョロキョロと驚いた表情のまま、周囲を見回す捺差内を、押し出すように白衣姿の老人の前に出した。

その聖麗高校の科学部長に対して、ニヤンニヤンの親代りの老人は、優しく手を差し出した。

「よろしく、ミスター・コウジ。わしは、ドクター・チャン。先ほどは、学校の屋上で失礼した」

「えッ、ああ、どうも……」

その手を握り返して、初めて捺差内は、その老人が、あの時、屋上でニヤンニヤンを取り返しに来た、老人だということを理解した。捺差内はその手を握りながらも、博士に対して、不審な視線を送らないわけには行かなかった。何より、ニヤンニヤンは、この老人の手から逃れたがっていたように、捺差内には思えたのだ。

「心配には及ばん、ニヤンニヤンは、無事じゃ……」

「本当ですか？どこ、どこにいるんですか！？会わせて下さい、今すぐに！」

娘の制服を握りしめたまま、勢い込む捺差内に、老人は困惑した視線を彩香に向けた。

彩香は、微かに頷いて見せた。

「ニャンニャンは、今は人の形をしておらん……それでも良いのかね？」

老人の言葉と、事務的な口調に、捺差内もそれが単なる比喻や、例えでないことを肌で感じた。

正直なところ、彼の背筋には冷たい汗が流れていた。捺差内は、自分をここに運んだ彩香を振り返った。彩香の表情は、変わらなかつたが、科学部長にはそれが最後の選択を迫る、魔女があるいは、女神のようにも思えた。

目を閉じて、捺差内は深く息を吸い込んだ。その瞼の裏には、姿を消す寸前の、ニャンニャンの苦悶の表情が浮かんでいた。

「構いません。俺、いや、僕は、何があっても、彼女を愛しています！」

その呆れるほど、恥ずかしいセリフに、彩香は思わず上を向いて表情を隠した。

この場に、京子さんがいなくて良かった。彩香は心のなかで、そう呟いていた。

「わかりました。行きましょう……」

白衣の老人は、捺差内の先に立って歩き始めた。

捺差内は、彩香を振り向いた。彼女も、ゆっくりと頷いていた。

それを見て、意を決したように、捺差内は老人の後に続いた。動機はどうあれ、成行きがなんであれ、そこまで思い詰めている者に対して、彩香は正直になるしかなかった。

後は、彼と彼女が、自分達で決める。彩香はそう、自分を納得させていた。

第15節

再会

そこは、たいして大きくもない部屋だった。

部屋の壁には、様々なケーブルやパイプが、ビッシリと並び、それらのすべてが、部屋の中央の大きく、透明な円筒の上部に繋がっていた。

その円筒の中には、何やら、緑色の液体が満たされ、底の方から泡立っていた。

「あれが、ニャンニャンじゃ……」

老人にそう言われて、その円筒を指差されても、捺差内にはどこにあの娘がいるのか、まったくわからなかった。

それでも、その円筒に近付くと、恐る恐る中に目を向けた。良く見ると、その円筒の中の緑色の液体の中には、何かモヤモヤとした煙のような灰色のモノが、中心部分に浮かんでいた。

その、アメーバーのように動き回る不定形なモノに、捺差内は目を凝らした。すると、その真ん中に、何やら顔のようなモノが浮かび上がっていることに、気が付いた。

「ニャンニャン……!？」

口にして、その言葉に驚いた捺差内は、背後を振り返った。

そこには、哀し気に頷く、悄然とした老人の姿があった。

「それが、生体ユニットの原型物質じゃ……そこから、ニャンニャンの体が再構成される。人間の頭脳に当たる部分は、このギガ・マックスそのものの中にあるから、体さえ再生できれば、何度でも蘇るのじゃ……」

捺差内は、この時初めて、ニャンニャンが自分は人間ではないと言った意味が、理解できた。あれが、比喻でも何でもなく、本当のことだということを、彼は初めて知ったのだった。

思わず、捺差内の胃の辺りから、吐き気が込み上げて来た。とつさに口を押さえて、どこか吐き出してもよいところはないかと、科学部長は周囲を見回した。

いつの間にか、彼は人間ではないものを自分が愛したのだと、本気で思い始めていた。そして、ここへ自分を連れて来た、これもまた人間離れた女子生徒の言葉を思い出した。もし後悔したら……いや、俺は後悔しない、絶対にしない！吐くものか、断じて、絶対に、何がなんでも吐くものか！！

とつさに、そんな悲愴な決意を固めた捺差内は、口元までこみ上げて来たモノを、必死の思いで飲み下した。

「ニャンニャンは、元通りに、なるんですね！？」

喉を詰まらせ、ゼイゼイ言いながら、やつのことで、捺差内は白衣の老人に、そう尋ねることが出来た。

ドクターと呼ばれる老人は、自分が作り上げた人工の人格を慕って、ここまで来てくれた若者に、穏やかな微笑みを向けていた。

「もちろんだとも、必ず、元通りになる」

「よかった……」

確信に満ちた、老科学者の言葉に、ホッと安堵の吐息をした捺差内は、再び円筒の中を目を向けた。

いつの間に、円筒の中では、灰色の物質が固まりはじめ、まず、娘の頭の部分が、それとわかるほど、かなりハッキリと形作られて来ていた。

「彩の姫巫である、ミス・サイカによって、一度は原型物質にバラバラに分解されそうになった。しかも、虚構のデーターに質量を与える、ギガ・マックスの変換システムがオーバー・ロードを起こしたために、その肉体構成が維持できなくなったのじゃ」

透明な壁を通じて、無機物が有機物となり、やがて人の形を取り、可憐な少女になって行く過程を、捺差内は目の当たりにしていた。

そんな彼に対して、老人は乾いた声で説明を続けた。その言葉を理解しているのか、いないのか、科学部長はただ黙って、聞いてい

るだけだった。

「この娘は、ニャンニャンは、このギガ・マックスがなければ、その体を維持することはできない。このギガ・マックスは、巨大なエネルギー変換器として、ニャンニャンの体を維持すると同時に、ニャンニャンの頭脳としての役割も果たしてある……」

捺差内は、その博士の言葉に、険しい表情で振り返った。

「だとすれば、この飛行機が墜落したら……」

「そこで、ニャンニャンの活動も終わる」

捺差内の表情に、恐怖が走った。

だが、老人は穏やかな顔つきで首を振った。

「その点は心配いらない。このギガ・マックスは、あと百年は、このまま飛び続け、ニャンニャンにエネルギーを送り続けることが出来る。君と共に人生を全うするとしても、決して少な過ぎることとは、ないじゃろう……」

その老人の言葉に、意図的な表現を感じて、この純情な科学部長は、顔を赤く染めた。

その表情を隠すように、若者は老人に娘の制服を差し出した。目を細めてそれを手に取った老人は、首を振ってそれを若者に返した。「それは、君から直接、ニャンニャンに渡してやってくれたまえ……」

……
変態オタクと罵られる男子高校生は、白衣の老人の言葉の意味を理解した。この透明な円筒の中から出て来る少女は、恐らく何も身に付けていないはずだった。

その少女に直接渡してやれと、この年老いた科学者は言っているのだ。捺差内は、思わず顔を赤らめると、その制服を握りしめて、再び円筒の壁の向こうに視線を移した。それには、思わず赤らんだ表情を隠す意味も、あったのだろう。

同じ円筒の中身を見つめる、老人と若者の間に、ほのぼのとした感情の気配が流れた。

無粋な警告音と、それに続く、この飛行物体を管理するマックス

という名の人格の報告が、そんな雰囲気を粉々にブチ壊した。

『警告します！ミサイル、多数接近。回避不能！！』

「いかん！君は、ここにいてくれ……」

そう言い残すと、老人は顔色を変えて、部屋を飛び出して行った。後に残った擦差内は、円筒の中のニャンニャンと向き合っていると、その場に座り込んだ。もはや彼は、何があっても、この場を動かない決意を固めていた。

第16節

防御能力

制御室の中で、彩香は、迫り来るミサイルを捉えたレーダー画面を見つめていた。

そこへ、老人が駆け込んで来た。

「何とか、なんなのか、マックス!？」

『ドクター、ニャンニャンの再生作業を行なっている限り、防護シールドは張れません。しかし、作業を中断すれば、二度とニャンニャンの再生は出来なくなります……』

「そんなことは、わかっておる!」

老人は、思わず声を荒げた。

彩香は、そんな老人に尋ねた。

「その、防護シールドとかを張れば、何とかなるのですか?」

「そうじゃ、ミサイルの爆発から免れるだけではない、レーダーなどの探知装置からも、逃れられる……じゃが、今はだめじゃ。そちらに回すだけの、エネルギーがない!」

「わかりました。マックスさんとやら、そのシールドとかのエネルギーは、私が供給します。あなたは、ニャンニャンさんの再生に、専念して下さいな。ニャンニャンの再生を私がやつても構わないけど、それは、あの部長さんも、ニャンニャンさん本人も、きつと喜ばないでしょうから」

彩香の口調は、どこまでもアツケラカンとしていた。そんな言葉に、この巨大な宇宙を飛ぶ人工知能体であり、エネルギー転換装置でもある、ギガ・マックスの疑似人格も、思わず絶句した。

もちろん、ドクター・チャンも、しばらくの間、口を開けたまま、閉じることが出来なかった。

「いいですか、装置を作動して下さい。エネルギーを、送りますよ

……」

自分の長い髪を束ねる、赤いリボンを解いた彩香は、目の前のギガ・マックスの制御盤に両手を着くと、目を閉じた。

彩香の長い髪が、不思議な輝きを始めたかと思うと、ゆっくりと逆立って行った。

『ド、ドクター、本当です！本当に、エネルギーが、わからない、私には、理解できません！！』

困惑の言葉を口にするマックスを、老人が叱咤した。

「そんなことはどうでもいい！マックス、シールド展開、急ぐんじや！！」

その直後、いくつかの爆発が、同時に、ギガ・マックスの周囲で発生した。

しかし、中にいる者は、ほとんど衝撃を感じなかった。

『成功です！ドクター、シールドは、完全に機能しています！！』

「喜ぶのはまだ早い！ほれ、次が来るぞ！！」

次々と、ミサイルがギガ・マックスを襲ったが、それらはすべて直接機体に触れることなく、その近くで爆発するだけだった。

老人はその様子に、ホッと安堵の胸を撫で下ろした。同時に、傍らの彩香を見て、その底知れぬ力に、ただただ、啞然とするばかりだった。

自分の乗っているものが、派手な攻撃を受けていることなど、捺差内はまったく知らないでいられた。彼は、目の前で愛する娘の姿が、徐々に形作られて行くのを、嬉しそうに見つめていた。もし、こんな科学部長の姿を、聖麗高校の女子生徒が見たら、それ見たことか、やっぱりアイツは正真証明の変態オタクだと、頷き合うことだろう。

しかし、捺差内にとってはそんな女子生徒の評価など、どうでもいいことだった。彼は、ニヤンニヤンが、そんな粘土細工のように作られるのだという、現実を受け入れた時から、その完成を心待ちにすることが出来た。

既に、彼は娘が再生する過程そのものを、純粋な喜びとして眺めているのだった。彼は今、ほとんど上半身が出来上がって、これから下半身になるという時に、果して男らしく顔を背けていたものか、それとも科学を志した者として、堂々と、冷静に見守るべきか、本気で悩んでいた。

やはり、後ろを向いていよう。彼女に対しては、科学者としてではなく、一人の男性として接したい！そう、納得して、彼は後ろを向こうとした。

その時、激しい衝撃が、捺差内の体を宙に放り上げ、激しく床に叩きつけた。それも、一度ならず、二度三度と彼の体は宙に舞った。「何だ、どうした!？」

何とか気を失わずに済んだ捺差内は、ヨロヨロと立ち上がった。その時にも、ニヤンニヤンの制服を手放さなかったことは、立派と言っ他なかった。

彼の周囲では、部屋の警告灯らしい赤い光が点滅し、警報らしいチャイムが鳴り響いた。驚いた捺差内は、ニヤンニヤンのいる円筒を振り返った。

円筒の頂上には、何本ものケーブルやパイプが繋がっていた。その内の一本のパイプが外れて、その内部から火花が散っていた。

円筒の中で、ほとんど髪の毛も伸びて、完全な形になっていたニヤンニヤンの顔に、苦し気な表情が浮かんでいた。瞳がないままの両目が、上を向いて大きく見開かれ、今にも眼球が飛び出しそうになっていた。

「ニヤンニヤン！どうした？苦しいのか!？」

透明な壁に顔を押しつけて、捺差内は必死に中の、半分娘になりかけているモノに呼びかけた。

だが、娘はわずかに動く上半身と、腕を震わせるばかりだった。

第17節

最強の兵器

突然の衝撃に、白衣の老人も、床に叩き付けられたが、彩香は微動だにしなかった。

それどころか、片手を上げて、再度の衝撃で再び宙に浮かんだ博士の体を、柔らかく着地させた。

『衝撃により、再生装置、一部破損！』

マックスの言葉に、血の流れる額を押えた、白衣の老人の顔色が変わった。博士は壁にもたれ掛けると、よろめく体をどうにか支えた。

「ドクター、ここはよろしいですから、ニヤンニヤンさんの方を！」
より一層輝きを増した、逆立つ髪を揺らめかせて、彩香は老人を促した。

老人は、大きく頷くと、よろめく足を踏みしめながら、部屋を出て行った。

『彩の姫巫、これは核ミサイルです』

「その名で、呼ばないで下さいな。わたくしの名前は、彩香。ミスでも、荒神でもなく、ただ彩香だけよ！よろしい？」

『失礼しました。では、彩香。核ミサイル、第二波来ますけれど、どうなさいます』

「核の反応を止めましょう。とりあえず、それで何とかならないかしら？発射したところに戻してもいいんだけど、それでは騒ぎが大きくなるでしょう？」

どこまでも、彩香は落ち着いていた。自分が夫と選んだ男性と、それ以外の、少数の親しい者達が関わる場合を除けば、彼女が取り乱すことは有り得なかった。

むしろ、この巨大な機体を管理する人格である、マックスの方が、

機械らしくもなく、大いに狼狽えていた。それは、博士がより人間らしい人格を与えたためもあったが、それ以上に、彩香の言葉が常識離れしているためだった。

『止める？どうやって？』

「核物質には、確か半減期とかいうものが、ありましたわね？」

『確かに、ありますが……』

「弾頭の時間を、一万年ほど進めれば、役に立たなくなるんじゃないかしら？」

『時間を進める？いや、仮に、それが出来たとしても、一万年ぐらいでは足りないでしょう……』

「では、そうすれば、よろしいのかしら？」

『そうですねエ……時間を進めることが出来るくらいなら、温度を絶対零度まで、下げることは可能でしょうか？』

「お安い御用ですわ」

余りにもアツサリとした、彩香の返事に、再びマックスは軽く沈黙した。

だが、今度の困惑は、それほど長く続かなかった。状況が、それほど、切迫していたのだ。

『では、やって下さい。温度をそこまで下げれば、核物質はともかく、起爆装置が作動しません……』

困惑しきったマックスの返答に、彩香は微かに笑って答えると、目を閉じて精神の集中を計った。彼女の頭の中には、大気圏を貫いて迫り来る、何基かの核ミサイルの姿が浮かんでいた。

その次の数秒間に、マックスは自分の体から外に向けて、計測不能な異様なエネルギーの流れを感じて、初めて人間的な恐怖の感情を覚えた。

シールドに引っかかった核ミサイルは、すべて、そのまま爆発もせずに、粉々に砕け、文字通り宇宙の塵となって漂って行った。

第18節

純愛の果て

異常の発生した再生室に、ドクター・チャンはようやくたどり着いた。

白衣の老人は、部屋の機能が正常であることと、ニャンニャンの再生が、無事に進んでいることを知って驚いた。部屋の中央の、円筒の中の少女の姿は、もはやほとんど完全な形となり、いつ目を開けて動きだしても、おかしくない状態になっていた。

「こ、これは！」

円筒の中の少女の状態に、ホツとした老人は、その視線を円筒の上部に向けて、息を飲んだ。そこでは捺差内が、外れたパイプを握って、うつ伏せに倒れていた。

驚いた老人は、機器を操作すると、改めてパイプを正確に繋ぎ直した。それから慎重に、マジック・ハンドのようなもので、捺差内の体をゆつくりと床に下ろした。

「おいッ、しっかり、しっかりするんじや！」

老人の声に、少女の制服をしっかりと握りしめていた捺差内は、ようやく薄目を開けた。

「あの、ニャンニャンは……」

「だいじょうぶ、だいじょうぶじや。君のおかげだ。君が、素手でパイプを繋いでくれたおかげじゃ……」

「そうか、よかった。流れていたのが、電流みたいだったから、自分の手や体なら、伝導するんじゃないかと思ったけど、うまく行っ
たみたいだな……」

そう、弱々しく言っていると、捺差内は満足な表情を浮かべて、微笑んだ。

老人は、激しく捺差内を揺すった。捺差内の目が、今度閉じられ

たら、もう二度と開くことがないように思えたのだ。

「こりゃ、しっかりせい！もうすぐじゃ、もうすぐニャンニャンが蘇る。その姿を、その目で見ないつもりか！？」

「ニャンニャンの姿、見たいな……でも、ダメみたい、もう力がな
いんだ……」

「何を言っておるんじゃ、こりゃ！」

「お爺さん、ニャンニャンに、制服を返して……」

それだけ言い残すと、捺差内は再び目を閉じて、動かなくなった。老人は激しくその体を揺すり、耳元で怒鳴り続けたが、科学部長の目が開くことはなかった。白衣の老人は、ガツクリと肩を落とした。

「ドクター、ちょっと、どくよろし……」

耳元の声に、老人は驚いて振り返った。

そこには、ズブ濡れで、生まれたままの姿のニャンニャンが、立っていた。

「ニャンニャン、お前、まだ再生が終わっていないんじゃ……」

驚きの目を見張った博士は、その全裸の娘の背中から、幾本もの紐状の有機物が伸びていることに気付いて、息を飲んだ。

背後の円筒は、正面から二つに開き、そこから部屋の床に、緑色の液体が流れ出していた。博士は、それが中から無理矢理のように、開けられたのだということを知った。

ニャンニャンの背中中の紐は、長く伸びて、彼女の生命を維持する、円筒の上部に繋がっていた。彼女は、とっさに自分の体の一部を、再生器の一部に繋ぐことによって、外に出ることを可能にしたのだ。もちろん、そんなことが出来るように、博士がしたわけではなかった。この人工生命体は、自分の意志と判断で、それを実行したのだった。

白衣姿の老人は、もはや二人の間に、自分が入り込む必要がないことを、この時ハッキリと感じていた。

「幸司、幸司、起きるある。朝あるよ、目を覚ますよろし……」

再生したニャンニャンは、そう捺差内の耳元でささやくと、そつと彼の唇に自分のそれを重ねた。

老人は、娘の体から淡い緑色の輝きが起こり、それが接触している唇を通じて、男の方にも移るのを、確かに目撃した。それは、老人が作り上げたはずの人工生命には、本来有り得ないはずの現象だった。

「ニャンニャン、あれ、どうしたんだらう。確か、君は消えてしまつて……」

「幸司、幸司のおかげで、ニャンニャン、また、戻れたあるよ！」
ようやく目を開けて、何やら混乱した捺差内の胸に、そう言った少女が、激しく顔を埋めた。

その少女の体を抱こうとして、初めて、この思い込みの激しい、単純な若者は、相手が全裸であることに気が付いた。彼は手を動かすと、しっかりと握っていた娘の制服を差し出した。

「ニャンニャン、その、こういうことは、もっと別の場所の方が、いいと思うよ。それに、こんなに濡れていては、風邪をひくよ。さア、これを着て……」

相変わらず、どこか間の抜けた科学部長の、奇妙に冷静な言葉だった。

しかし、ニャンニャンにとっては、なによりも嬉しい言葉だったろう、彼女は制服を受け取ったままその両目から、涙をあふれさせた。そして、濡れたままの、まだ生乾きの中国娘は、より激しくそんな捺差内に抱きついて行った。

抱きつかれた科学部長は、ますます困惑し、そのまま顔を真っ赤に染め上げると、やがて気を失ってしまった。

第19節

自業自得

老人が、制御室に戻ると、ちょうど通信モニターに、マックスがマスターと呼ぶ、髪の薄い小男が映ったところだった。

「どうやら、つまらん小娘の再生は諦めたようだな、結構結構……
それでは、まともなビジネスの話でもしようか。ドクター・チャン。
大陸間弾道弾ですら無力とする、そのギガ・マックスの能力だけと
つてみても、大変な商品価値だ」

「断わる！」

言下にそう言われて、小男は驚いたような表情をした。彼は、ギガ・マックスの防戦を、てつきり取り引きの意思表示だと思い込んでいたのだ。

もはや老人に、兵器産業と手を組む意志はなかった。何よりも、そこにいる彩の姫巫、つまり彩香を敵に回すことなど、考えただけでも恐ろしかった。

「君は、何か勘違いしているようだ。核ミサイルを無力化したのは、ギガ・マックスではない。彼女だ……」

そう言って、博士は傍らの彩香を手招きした。

モニターの中の小男の前に、初めて彩香が、その長い髪を再びリボンで束ねながら現われた。

「なんだ、この娘は……まさか、サイカ・アラミ、彩の姫巫！？ど
ういうことだ、これは？」

初めて、彩香を直接目にした小男は、ひどく狼狽した。

そして、そんな小男を見る彩香の眼差しは、恐ろしいほどに冷え切っていた。

「あなたが、黒幕さんね？わたくしのことは、もう、御存知ですね？」

「お前が……まさか、そんな、なぜ、なぜそこにいる！」

「そんなことは、どうでもいいわ。あなたが、わたくしを抹殺しろと、お命じになったのね？」

モニターの向こう側で、小男は背中に汗を掻いていた。そこは、かつて彼が、合衆国の国防大臣と密談した、あの部屋だった。

彼は、その部屋にいる自分の部下に、ありったけの核ミサイルを用意するように、手で合図していた。

「あらあら、核ミサイルなんて、世界中からここに集めたって、何のお役にも立たないこと、先ほどおわかりになったんじゃ、ありませんの？何でしたら、すべてそちらに送り返しても、よろしいのよ」
小男は、モニターの向こうで、この小娘が、自分のやろうとして
いることを見抜いていることに、さらにドツと汗を掻いた。

まさか、いくらなんでも、そんな……小男は、必死に自分の考えを打ち消そうとしていた。

「その通りですわ。わたくしには、時間や距離と言うものは、ほとんど、意味がありませんの、おわかりになれないかしら？」

小男は、腰を抜かさんばかりに、驚愕した。

間違いなく、この娘は自分の考えを読みとっている。しかも、核ミサイルすら、無力化できると公言しているのだった。

いまさらながら、なぜ、合衆国がこの娘に干渉することを諦めたのか、あのファイルの意味が、ようやく理解できた。だが、すべては後の祭りだった。

「その通りですわ。もう、遅いようすわね……」

「俺を、どうする気だ……」

モニターの中で、小男は真っ青になりながらも、逃げることも出
来ずにいた。

彩香は、その小心者ぶりに、薄い唇の端を上げて微笑んだ。それが、彼女が最高に、嫌悪を感じている証拠であることを、京子や透なら知っていた。

「あなたはどうか、今までにだいぶ、酷いことを、なさって来た

ようすわね。その相手が感じたのと、同じ思いを感じてみる必要だとは、思いませんか？」

「お、俺じゃない、俺だけじゃない！あんたをターゲットにしたのは、国防大臣も一緒だったんだ！！おいッ、何をしている、通信を切れ！」

小男は、目先の恐怖に怯えて、そう叫んだ。彼の部下達は、決して無能ではなかったので、即座に主人の命令を実行した。

しかし、依然として冷たい眼差し若い女子高生は、モニター画面からじつと小男を見つめていた。

「何をしている！早く、この忌々しい小娘の姿を消すんだ！！わらんのか！？」

泡を飛ばして、彼は手近な部下を怒鳴り飛ばした。

だが、彼の部下は、驚きの表情を隠そうとはせずに、逆に彼に問い返した。

「通信は、既に切れています。これが、通信であるはずはありません！いったい、この映像は、何なんです！？」

「なんだと、じゃあ、ここに映っているのは……」

小男は、モニターの中の彩香を指差して、大きくその両目を見開いた。

彩香の姿は、既にモニターの外へ出ていたのだ。

「言っただしょう？わたくしには、距離も時間も、関係ないって」

そう言っ、小男の前に立った彩香は、ニッコリと微笑んだ。

恐慌状態になった小男は、夢中で叫んだ。

「撃て！撃て！この化物を殺せ！！」

その瞬間、啞然としていた部下達は、正気に返り、持っていた拳銃を抜き放つと、同時に引金を引いた。

何丁もの銃が、一斉に火を吹き、銃弾が立っている彩香の周囲に殺到した。彩香自身はもちろん、彼女が映っていたモニターやら、その付近の制御盤やらが撃ち碎かれ、無数の穴を開けて行った。

やがて、火花と硝煙が収まると、そこに女子高生の姿は、影も形

もなかった。部下達は、お互いに顔を見合わせたが、その時、不気味な呻き声に、彼らの視線が集まった。

彼らの主人である、背の低い男は、砕けたモニターの前で、自分で自分の首を締めながら、口からは泡を吹き、目は白目を剥いていた。やがて、わけのわからない言葉を口走ると、自分の持っていた銃を取り出し、自分の膝めがけて発射した。

両膝を撃ち抜き、その場に倒れ込んだ小男は、両足から、ガラガラと血を流してもがいていた。やがて、今度は自分の両耳を、交互に拳銃で撃ち抜いた。

その不気味な様子を、彼の部下達は、その場に凍り付いたように、ただ黙って眺めていた。その中の何人かは、それが、相手を殺さない程度に痛めつける、その小男が得意としていた、虐待方法であることに気が付いた。彼らの腹の奥底から、嘔吐感が沸き起こっていた。

彼らは、モニターから現われた若い娘が、そこでのたうつ小男に向かって、言った言葉を聞いていた。彼女は、相手が感じたのと、同じ思いをしてみることが必要だと、彼に言い放ったのだった。

彼らの目の前で、繰り広げられている光景は、まさにそれだった。部下達は、一様に気味の悪い表情を見交わし、やがて、その部屋を出て行った。

第20節

触らぬ神

ある朝早く、ホワイト・ハウスに呼び出された国防大臣は、大統領から、突然、辞職を勧告されて仰天した。

「史上最強のサイバー・ウェポンと、世界最高のサイキッカー。この二人を敵に回して、あなたは、合衆国と戦争でもさせるおつもりだったのですか!？」

彼女は、この若い国の歴史上、始めて大統領の職に就いた女性だった。

年齢を感じさせない、上品な顔立ちを強ばらせて、女性大統領は信頼していたはずの国防大臣を見つめた。

彼女は大臣と同じく、眼鏡の愛用者だった。大統領の金縁で細身のエレガントな眼鏡の奥から、初老の大臣は鋭い眼差しを向けられていた。とつさのことで、彼には何のことだかわからなかった。

「彩の姫巫こと、サイカ・アラミに関しては、国連を中心に、つい最近、極秘の不干渉協定が各国政府間で結ばれたばかりだというのに、今度のことで、この協定に、もう一人の人物を、加えなければならぬでしょう。その責任がどこにあるのか、あなたには、よくわかりのほうですね?」

国防大臣は、初めて、自分が大統領に対して、秘密に行なっていた計画のことを思い出した。

そのターゲットの名前を、大統領が以前から知っていることを、彼はいま初めて知ったのだった。もし、そんな、国連を中心とした極秘協定の存在を知っていれば、幾らなんでも、あの小男の計画を、認めたりはしなかっただろう。

国防大臣は、必死に自分が知らなかったことを理由に、抗弁した。彼は、潜在的な脅威に対する、自分の愛国心を強調した。

そんな国防大臣に対して、大統領は例の小男が、現在、精神に異常を来たして、病院に収容されていることを、簡単に告げた。

「何でも、信じられないような、さまざまな方法で、自分を傷付けるのだそうですよ。止めなければ、死ぬまで続けるだろうという話です、死んだ方がマシだと思えるほどの、苦痛を味わいながら……」

そして大統領は、その小男が残した記録から、彼と大臣との関わりが、すべて明るみに出たことを告げた。この国の最高指導者は、速やかに、健康上の理由か何かで、自分から職を辞してくれば、この件は不問にするとも言った。

国防大臣は、驚愕しながらも、考える時間が欲しいと言って、何とか、即答を避けた。時間を稼いで、何とか逆転の道を探ろうというつもりだったのかも知れない。

大統領は、そんなに長くは待てないと答えたが、その場で彼を辞職させることも、出来なかった。国防大臣は、ようやくのことで、大統領の執務室を出ることになった。

そんな彼を、男性とも女性ともわからない、黒いスーツを着た美しい人物が廊下で待っていた。その姿を、国防大臣は、最近のあるファイルで見た記憶があった。

「貴様は、まさか、アナコンダ……」

この国の中でも、最も警備の厳しいはずの場所に、何の苦勞もなく、その人物は入り込むことが出来ていた。

国防大臣は、すべて、大統領が承知であることを察して、背筋が凍る恐怖を覚えた。

「アナコンダとは、殺し屋のコード・ネームですわ。わたくしの名前は、大蛇虹子。お間違えのないように……今日は、はるばる太平洋の向こうから、わたくしの雇主の、伝言をお伝えに参りました」
そう言つと、かつて世界最高の狙撃者と詠われ、今は彩香の実家で、秘書のようなことをしている人物は、国防大臣に近づいた。

大臣は、蛇に睨まれたカエルそのままに、身動き一つできず、滝のような汗を滴らせていた。

「他言無用。手出し無用。ご意見無用。それが、あなた方の言う彩の姫巫の言葉です。おわかりですね？」

それだけささやくと、虹子は廊下の出口に向かって、ゆっくり歩いて行った。

その背中で、間もなく、元大臣と呼ばれることになる初老の男は、壁に背中を預けるように、ズルズルと廊下に座り込んだ。

「触らぬ神に、祟りなし……私は、神に、触れてしまったのか!？」
沈痛な響きをもって、そう彼は呟いていた。だが、そんな彼の言葉を聞く者は、誰もいなかった。

合衆国の、国防大臣が辞任したニュースは、その日の内に世界中に広まった。

第21節

エピソード

合衆国の大臣が辞任したニュースに対して、聖麗高校のほとんどの者、特に生徒達は、まったく言っていないほど、感心を持たなかった。

世界情勢やら、政治に無関心なのは、ここの生徒に始まることではなかった。だから、世界が脅威的な勢いで軍縮に進んでいることに、関心を払う生徒も少なかった。

少なくとも、その原因の一つが、自分の身近にあったとしても。

「なんで？なんで、アタシらが、こんなことをしなきゃ、ならないのよ！？」

「あんたが、荒神会長を倒したいなんて、言うからじゃない！」

「だからって、なんで、アタシらが、変態オタクの科学部を、手伝わなきゃならないよ！？」

不毛な会話で、愚痴を並べていたのは、例の彩香を目の仇にしていた、不良娘とその仲間だった。

彼女達は、渋々ではあったが、部員が減って人手不足となった科学部を、準部員として手伝っていた。

「ブツブツ言わないで、手伝うよろし。生徒会と生徒会長を、打倒したいあるなら、黙って私達を手伝えばよろしいある。そうあるね、幸司！？」

留学生から、正式にこの学校の生徒の身分となった中国娘は、そう言つと、複雑な機器を組み立てている、傍らの男子生徒を振り返った。

科学部長は、そんなニヤンニヤンと共に、日夜、B2モードをやりパワー・アップした、B3モードのシステム開発に没頭していた。その過程で、彼は実験の失敗から、何度となく、化学室及びその準

備室を破損した。

教師からの申し出もあつて、とうとう生徒会は、生徒会長の名前で科学部に対して、一ヶ月間の謹慎を命じた。もちろん、それを決定した役員会には、他の役員会と同様、彩香は出席すらしてはいなかった。

本人にもよくわからない信念と、思い込みの激しさから、科学部長は生徒会と戦うことを、自分の使命だと決めていた。その捺差内に、そのような生徒会の決定が、受け入れらるはずはなかった。

かくして、再び、科学部が作り上げた幻影の立体映像が、ニヤニヤンの力で実体化させられ、生徒会役員及び、生徒会長に挑みかけた。最初の衝突以来、ニヤンニヤンが、この学校の生徒となつたこともあつて、この両者の対決は何度となく繰り返されていた。今や、聖麗高校の恒例行事の一つという雰囲気さえあつた。

その度に校庭は戦場となり、校舎や施設の一部、あるいは全部が破損していた。だが、そんなことは、この学校の生徒や教師達にとつて、部活動で校舎の窓ガラスが割れたことと、同じようなものだった。

「淫乱生徒会長！今日こそ、きっぱり決着を着けてやる！！」

実体化した、巨大な恐竜ロボットを操作しながら、そう叫ぶ捺差内に対して、彩香はキツパリと言いつ返した。

「わたくしが淫乱なら、あなたは、ロリコンではありませんか！？違うとは、よもおつしやいませんわね！」

その言葉に、捺差内は自分に寄り添うニヤンニヤンを見て、考え込んだ。確かに、彼女は十二歳そこそこにはしか見えなかった。

しかも、もし生まれた時間から計算すれば、この青い目の中国娘が、一歳にもなっていないことを、誰であろうこの科学部長だけは知っていた。年齢だけでロリコンと呼ばれるのなら、これこそまさに、究極のロリコンと言っても間違いではなかった。

何で、こんなことに、なつたんだろう？こんなつもりじゃ、なかったんじゃないのか？思い込みの激しい単純な科学部長も、その瞬

間ばかりは、そんな風に悩んだりもした。しかし、それも全幅の信頼と愛情を込めて、自分を振り返る少女の、無邪気で屈託のない笑顔を見るまでだった。そんな疑問は、一瞬にして彼の頭から蒸発していた。

ロリコンと呼ぶなら呼べ！この愛さえあれば、自分に恐れるものは、何も無いのだ！そう開き直って、迷いを振り払った捺差内は、心の中で誓った。彼女のためなら、どのような汚名も甘んじて受ける！と。

愛のために戦い、名誉のために死す。そんな、中世の騎士さながらの、悲愴な決意で、科学部長は生徒会長に挑み掛かって行く、何度やっても、結果は同じにも関わらず……。

その様子を、行儀悪く生徒会室の窓枠に座って、リングをかじりながら、副会長兼体育実行委員長の京子が眺めていた。彼女は、自分の隣りに立って、同じように見物している叔父に尋ねた。

「ねエ、叔父様。彩香と一緒にになって、後悔してない？」

生徒でもある姪の、突然の問いに、一瞬答えに詰まった透だったが、やがて頭を掻きながら答えた。

「少なくとも、退屈はしないな……」

少し顔を赤らめた、尊敬する叔父を見て、京子は心の中で、自分だけは必ずまともな恋愛をしようと、誓っていた。それは、彼女を知る者が聞いたら、誰もがまず信じようとはしない種類の誓いだっ

た。京子の、そんな誓いのことなど、知るはずもない彩香は、地響きを立てて襲いかかる巨大恐竜型ロボットを、簡単に片手で受け止めた。次の瞬間、生徒会長の腕が回って、ロボットは空高く放り投げ上げられた。

赤い夕焼けの広がる空に、舞い上がった恐竜ロボットは、そのまま、一番星の微かな瞬きの中に、消えるように見えなくなった。

地響きと砂ぼこりが収まった校庭には、賭に勝った生徒や教師の歓声と、同じく負けた相手達のため息がこだましていた。

「やっぱり、ロボットは女の子の方が良いあるよ。今度は、水着かレオタードにするあるネ！」

そう言って、ガツクリと肩を落とした科学部長に、今や副部長であると同時に、全校生徒が認めた恋人でもある中国娘が寄り添った。そんな少女に、捺差内は寂しく首を振った。

「水着やレオタードは邪道だ！美少女は、セーラー服が最強なんだ！！」

何やらわけのわからない、そんな変態オタク部長の言葉に、青い目の中国娘はキョトンとしながらも、嬉しそうに微笑んだ。

夕焼け空を背景に、校庭の中にシルエツトで浮かぶその光景は、見方によってはずいぶんと麗しい光景だった。多くの男子生徒は、羨ましいと思うと同時に、苦々しい思いで見つめていた。

だが、それを冷やかしに行くだけの度胸は、誰にもなかった。

FIN

第21節（後書き）

先に掲載した、第1話よりは短い話ですが、携帯で読まれる際に短めのファイルで区切られた方が良くという御意見がございましたので、このような形にしてみました。いかがだったでしょうか？どちらにしても、拙い物語にお付き合いただきまして、ありがとうございます。さて、この彩香を主人公とした短編は、まだ1編ほど残っています。もし皆様の御希望があれば、是非こちらのサイトへ掲載したいと思いますので、宜しく御評価・御感想の程、お願い致します。また他の作品や、こちらには掲載できないアニメやマンガの評論や感想については、前書きでも述べました通りH I N A K A が主宰していますホーム・ページ『あんのん <http://ryuproj.com/cweb/site/aonow>』とブログ <http://blog.sonet.ne.jp/aonow/> にも色々ありますので、宜しければそちらの方も御覧いただければ、これに勝る喜びはありません。それでは、御高覧どうもありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5313d/>

姫巫伝説・彩香 さいか 2

2010年10月8日14時41分発行